

報 会

総 輯 編 No.13

陸海空合同東部ニューギニア戦友会

第十八軍収骨事業終結為賦蕪梓

野高六四 石田岳泉

旆旌南下し巴州に進み
此の地かつて敵の謀りを摧く
椰葉新たに飄へるものと軍路
啼禽先づ導くふるき壕丘
形骸已に朽つ密林のうち
殘甲猶お存す溪澗のほとり
十萬の同胞土に歸せしところ
晩霞血の如く河を染めて流る

平成二年を迎えて

東部ニューギニア戦友会々々長

田中 兼五郎

みなさん、明けましてお目出度うございます。

私もお蔭さまで数え年ながら八十歳を迎えさせていただきました。ここに、昭和六十四年（平成元年）を送り、新しい平成二年を迎えるにあたりまして若干の所感とお願いを申し上げます。新年の御挨拶とさせていただきます。

思えば、昭和六十四年（平成元年）は日本にとっても世界にとっても歴史上稀にしか無い大きな変化の年でありましたが、わが東部ニューギニア戦友会にとっても誠に意義深い年でありました。

まず第一に、昨年は東部ニューギニア地域での最後ともいへきサラワケット及びウエワク周辺地域の遺骨収集を行いました。そもそも遺骨収集はわれわれ戦友会の最も重要な事業であります。昭和四十四年の第一回以来年を重ねること三十一回、全戦友会員の一致結束した努力により遂に東部ニューギニア全地域の収骨完了といえる状態にまで漕ぎつき得たものであります。私はいま、何回かの募金運動に対するみなさまの絶大な御協力とニューギニア現地での遺骨収集に対する積極的な御参加のことなどを想起し心からの感謝の念が湧き起るのを禁ずることができませんでした。みなさま、ほんとうに有り難うございました。そしてまた、ほんとうに御苦労さまでした。

次に靖国神社と千鳥ヶ淵墓苑に対する奉仕であります。みなさま既に御承知のとおり昨年に、靖国神社では昭和の大修理といわれた大修理が竣工し、また千鳥ヶ淵墓苑では創建三十周年ということでそれぞれ盛大なお

祭りが行なわれました。これに対する戦友会の御奉仕については先きにも御報告申し上げていところでありますが、みなさまからの尊い募金のうちから心のこもった寄進をさせていただいていところであります。神社及び墓苑当局から深い感謝の意の御表示をいただいております。

神社の大修理とか、創建何十周年とかいうことは、めったにあることではありません。われわれの戦友会は昨年誠に得難い機会に恵まれたというべきでありまして、昭和六十四年（平成元年）の意義の大きさを改めて痛感する次第であります。

さて、われわれはこの意義の誠に大きかった年を終えてここに平成二年を迎えたわけですがわれわれの戦友会は今後なにをなすべきなのでしょう。あるいはなにをなすのが適当なのでしょう。平成三年春に合同慰霊祭を行なうことは既に決まっておりますがその他のことはなにも決まっております。ここで私はみなさまに對し、われわれの戦友会は今後如何にあるべきか、すなわち如何なる組織運営にするのがよいのか、如何なる事業を考えるのが適当なのかという問題について篤とお考えいただくようお願いする次第であります。

お考えいただく前提としましては、(1)前述しましたように戦友会の主要事業は概ね完了した状態にあること、(2)かねてみなさまからおあずかりしていた資金の残額はおおむね底をついたこと、及び(3)これは私個人の気持ちであります。今後再び募金運動はしたくないということでありまして。

ではみなさま、この新しい年がみなさまにとって御健康で、かつ実りある年であるよう祈りまして御挨拶を終わります。



東部ニューギニア戦友会

陸海空合同慰霊祭案内（予告）

東部ニューギニアの戦域において戦没された陸海空全戦友の英霊を慰め顕彰するため、第八回（四年目毎）合同慰霊祭を靖国神社に於て執り行なうことに、各部隊会世話人会において決定しました。依つて生存戦友始め関係御遺族様には万障お繰合せおさそい合せの上、是非ご参列下さるよう御案内申し上げます。

記

日時 平成三年四月六日 十一時より
場所 靖国神社 十時五十分参集殿集合
靖国神社玉串料 千鳥ヶ淵戦士墓苑の
献花参拝料 二千元 当日受付へ
各部隊会戦友会と懇親会

一、慰霊祭当日の祭典行事は、昇殿本殿において慰霊祭文奏上、各代表玉串奉典、慰霊拝礼、退下となり、引続いて千鳥ヶ淵戦没者墓苑に至り各自献花（献花は用意します）参拝をもって終了しますが、当日は全国よりの参列者は多人数（前回は一千名弱）に及ぶものと思われまので、懇親会場、宿舍等の設定は各部隊会において御配慮をお願い申し上げます。

二、各部隊会では毎年各地において慰霊祭と戦友会を催しておられることですが、平成三年度は東京大会として合同慰霊祭時に同調下さるよう調整方をお願い申し上げます。

三、軍直猛部隊各隊で単独、小人数参列で懇親会開催予定の無い向は、猛部隊会（軍司令部会）に同調して下さい。懇親の会を予定して参加をお待ち申し上げます。戦友事務局 後藤

平成元年度に実施された ニューギニア地域の収骨事業協力報告

第十八軍司令部 後藤友作

昭和三十年二月ニューギニアを含めた南東

方面戦域の戦没者遺骨収集事業が政府事業として、練習船大成丸が派遣され実施されたのを第一回目として、昭和四十四年度には戦友会独自の収骨事業、今回のサラワケット、ウエワク地域収骨事業協力まで数えて八回目であり、その都度戦友会より有志団員を編成し政府（厚生省）によって実施された遺骨収集事業に相応の人員を派遣し協力してきたことは衆知の通りであり、生存戦友による協力派遣団員の延べ人員は今回まで一三一名に及んでおります。

今回の収骨事業は昭和六十二年秋、サラワケット山中の調査遺骨収集実施結果により、厚生省当局においては同地域と六十年の未収骨地点であったウエワク地区数ヶ所の収骨事業を次年度に実施することを決定した。

その後、陸下が見えられ昭和が平成となり内政不安定もあって元年度予算通過おくれで当戦友会長宛の協力依頼は五月上旬厚生省より電話で連絡なされた。

戦友会においては急拠在京の各部隊会代表世話人会を六月一日に開催し、派遣団員の人選とその対応を協議の結果前例通りの協力と派遣団員を選定し準備体制に入った。

六月七日、厚生省援護局長名で当戦友会長宛公式協力依頼状は左記の通りである。

依頼状

政府はこの度東部ニューギニアに於て戦没者の遺骨収集を実施することになりました。つきましては次により貴会の協力を得たいので依頼します。

一、期間は七月八日先発員三名（戦友一）七月十三日本隊員二十五名（戦友五）より八月

四日遺骨引渡式までの間。

二、収骨地域はサラワケット山中、ラエ病院跡、ビエン、ビルンガ、イミンダグン、スワンダグン、ソナム、パウプ、ワリス、タラワイ島その他とする。

戦友会よりの派遣団員

- | | | | | |
|---|------|-----|----|---------|
| 1 | 大塚剛士 | 50 | 新潟 | ラエ |
| 2 | 宇佐美晃 | 51 | 茨城 | サラワケット |
| 3 | 森脇清治 | 102 | 岐阜 | ビエン |
| 4 | 会川利一 | 36 | 東京 | ビルンガ他 |
| 5 | 園田 定 | 79 | 東京 | ソナム、パウプ |
| 6 | 後藤友作 | 18 | 東京 | ワリス他 先発 |

遺骨収集団の構成は、厚生省職員、鈴木実団長を含めて四名、日本遺族会十一名、学生協力団員七名、総員二十八名となり大別三班に区分され現地において行動することになったのである。

収骨事業は計画通りに七月八日には先発隊三名（鈴木実団長、高野遺族、後藤戦友、他に通訳兼エージェンツよりの社員を含めて四名）は現地ニューギニアに直行となり、本隊は七月十三日出発追及し現地において受持地区班に合流のうえ、予定の収骨作業に従事したのであるがその詳細は受持地区に派遣された団員達の記録にお目通し願うことにして。

ポートモレスビーに到着した先発隊のうち高野遺族はラエに先行し諸準備をととのえることになり出発した。

鈴木実団長、後藤戦友は通訳と共に日本大使館を訪問し懇談した。その際ブーゲンビル島方面における政情悪化のこと、ウエワク方面の社会情勢が好ましくないこと等の情報があり今回の収骨事業に影響がなければよいが、と懸念されたが既に行動は発起されているこ

ともあり現地作業に最善を尽くすことになった。

その後先発員と大使館員は同道してニューギニア政府外務省を表敬訪問し、本事業実施に対する協力、便宜供与などを依頼し大筋の了承を得ることは出来たのであるが、日本政府より収骨事業実施依頼の外交上連絡文書到着が短期日の間であった（日本政府の年度予算通過五月末日でその後の依頼通達による）ために、当方よりも最大限の協力と便宜取計らいするが収骨作業実施の現地州政府での了解を得る必要あることとのであった。

柴田戦友とマイケル・ソマレ氏（元首相）との劇的再会を仲介し懇意願っている現外務大臣は不在のため面接出来なかったので伝言依頼のみとなり、ウエワクに先行し州政府と交渉しながら現地の収骨作業準備と対応を急ぐことになった。

鈴木実団長、後藤戦友は通訳、川畑支配人を同道して州政府に対して、今回の収骨事業には一層の支援を依頼すべく表敬を兼ねて訪問した、州政府副知事始め当事者達は、当方の計画予定地点の収骨作業は一向に差障ないし各部落に対しては通信連絡して協力依頼しておく、而し、現在イーストセビック州全体が凶悪犯罪多発による社会不安が増大しつつある、州警察はその取締りに全力を傾注しているため収骨団員の警護は出来兼ねる、とのことであったが、川畑支配人がホテルの用心棒？数名を現地案内を兼ねて常時警護することになり、本隊の到着を待つことになった。

やがて収骨団本隊員達が到着し計画通りに各班組織となつて収骨作業行動に移った。

サラワケット、ラエ班は高野遺族先導のもと、ラエ在住庄司氏の絶大な協力を得て、拠点移動、人員隊貨の運搬調査に至るまでヘリコプターを多分に駆使しながら努め、五十五柱の遺骨を迎えることが出来たのである。ラエ野戦病院跡では国内での情報に基づき

掘削機を使用し発掘に努力したのであるが、埋葬地点の相違であらうか発見することができなかったことは誠に心残りするものである。

ウエワク班二組はセビック河畔ビエンに向う、六十年収骨事業時に日時不足のため一部収骨したまま取り残されたという埋葬墓地跡であり、今回は期待をこめて発掘に努めたことであつたが河畔の湿地帯と四十余年という歳月の経過が厄いし、遺骨の大部が大地に帰しており四十三柱の収骨をもって完了した。続いて同組は山南ビルンガ、イミンダグン方面に行動を予定されていたのであるが、目的地点までの道中不穏との情報と、中止勧告が州政府よりなされたのでタラワイ島収骨行に変更となった。

タラワイ島の作業は、現地等の情報に基づき予定日時を収骨に努めたが発見するに至らず、期待に添い得なかったことである。

ウエワク班一組、予定されていたソナム現地名サオム）部落に直行、戦友慰霊団達が託してあつた遺骨六柱を無事に引取り第二の目的地点坂東川畔パウプ部落に行動する、アイタベ作戦攻防の激戦地ドリニューモアリバー（坂東川）現在は立派な架橋に便利している。四十四年戦友会独自収骨事業を実施した際此処パウプ部落は坂東川班（賀来班長）の拠点にしたところでもある。

その後現地の人達が附近より日本兵の遺骨を多数収骨、戦友収骨団の作業を見習って焼骨のうえ埋葬したという地点を発掘した。

雑草を刈取ると一平方メートル程を玉石で丸く囲つた中に葬り込まれていたようであつたが、堀る程に鉄帽飯盒（うち将校飯盒）十六点を確認できたが目ざす遺骨は変色した土と化していた。香を焚き永遠の冥福を祈るのみであつた。

現地の情報により、リニホク河西方カウク部落とソナム部落の中間地点ジャングル内を、現地住民の案内協力を得て捜索すること二日

東部ニューギニア戦没者遺骨 収集政府派遣団に参加して

高射砲五〇大隊 犬塚 剛士

昭和五十四年と五十五年と二回、当時の私の戦場であった、ラエ、サラモア、ラバウルに慰霊の旅に出かけた。

サラウェット山を越えた私は、何んとか山の麓まででもいいから行けぬものかと思ったのだが、十年前はその方法はなかった。

去年、サラウェット山中で父を亡くした、遺児高野勝利氏が、サラウェット山中に、数回もゆき、弾に当って立派に戦死され、戦友たちに埋葬してもらえた御骨はまだいい。サラウェット山中の二千数百名の将兵は、疫病に倒れ、食うに糧なく餓死し、頂上に至れば氷点下の寒さに凍死した人々である。自分一人でも多くのお骨を祖国に帰してあげたいと語るテレビ放送を見て感激してしまっ

二十数柱の亡き戦友を迎えることができた。
周辺一帯はジャングルと化していたがサゴ椰子林と水の流れがあった、アイタベ作戦のあと後退途次、傷病、糧食皆無、疲労困憊の極限となつて僅かなサゴ椰子林の周囲での最後ではなかったか、四十数年前の当時に想いを馳せ悲命に散つた戦友達の草むす屍を拾い集めるとき、忽然として涙線がゆるみ涙を禁じ得なかった。

ブーツの沖合約四十キロ、ワリス、タラワイ両島はアイタベ作戦後二十師団の傷病将兵数百名が一時休養し、数十名の戦没者を出したところと云われている。取骨の経過は同行園田戦友の手記に依ることにして、現地の社会情勢悪化中とのことで行動の制限を受けるハンデを負いつつ、も一五八柱の霊骨を迎えられたことを望外のよろこびとして報告申し上げます。

遺児の一青年が、私費を使って、こんなによつておるのに、自分には何も出来なかった事について、頭の下る思いであった。

今年政府がサラウェット山の遺骨収集を実施することをきき、東部ニューギニア戦友会にお願いして、幸い七月十二日から八月四日まで、サラウェット班（八名）の一員になることが出来た。

七月十三日成田を出発シシガポール経由ポートモレスビーに十四日朝七時過ぎに着き、ラエゆきの国内航空に乗りつき、昼ごろラエについた。そして翌十五日には、ヘリコプターで、標高二千米程のアペン部落に入つた。こゝで驚ろいたことが二つあった。

当時山越えの時は、アペンの人たちは高地民族であり、意志の通ずるかどうかも心配していたのだが、高野氏は、遺族代表として一緒だったので、部落民は高野氏に、すっかりなつてゐることである。彼に対して部落民は一軒の家をつくつて与えていたのであった。私もが突然出かけてゆく遺骨収集に協力を申し込んだって、なかなか無理なことだ。

転進作戦の途中、数千人の日本将兵に、驚ろいて逃げ去つた現住民の空家を一夜の宿とし、タロ芋畑を堀りつくし、豚や鶏を殺して食べてしまつたのである。日本人に対して反感を持つのは当然であるが、温かく我々を迎えてくれたのは、高野氏の今日までの努力の賜である。

もう一人、ラエに庄司弘道氏がいる。彼は終戦後、オーストラリアの会社で木材や鉱山開発などの仕事を重役としてやつておられる方のような方だ。サラウェット山中にゆくには、ヘリコプターをチャーターするより方法はない。然も普通のヘリでは頂上にはゆけない。エンジンの強力なものでなければならなかった。庄司氏の関係してゐる公団の所有するヘリを、その度に飛ばして貰うのであった。然かも、自分の仕事を放り出して、自らも

再々ヘリに同乗し、お骨の仮安置所には、自分の倉庫の鍵のかゝる広い一室を提供し、団の荷物などもすべて預かつてもらつたのである。

私は、他の地区は、ともあれ、このサラウェット山中の収集は、この高野、庄司両氏の協力がないと絶対出来ないことであつた。

アペン部落から早朝雲一つないサラウェット山を見た時は、あの山中に二千数百人の戦友が待っているかと思うと、声を出して泣き伏してしまつた。僅か五十五体の遺骨しか集められなかつたが、サラウェット山頂に立ち亡き戦友の霊を弔い、長い間心から離れることのなかつたことが、やつと晴れ、私の人生のけじめも、やつとついた気持ちで帰国した。

石田班長以下八名が協力一致、仲良く任務を遂行することの出来たことを感謝してゐる。然しラエ野戦病院跡では、一体も発見出来なかつた。それでも埋葬地点の範囲が縮まつたことであり意義はあつたと思う。来年再度ラエ野戦病院跡を実施するなら、是非参加させてもらいたいと思う。

帰国後、亡くなつた戦友のお参りに、あちこちと出かけてゐる、今日このごろである。

（平成元年八月二十五日記）

一、午前四時満月浴ゆるサラウェット山に声あげて泣き伏してしまひぬ

二、雲間よりサラウェットが顔出せば戦友の面影次々浮ぶ

三、朝露を手ではきなで顔洗ふサラウェットに雲一つなし

四、ヘリコプターより降りし近くに三人の野ざらしのまゝ、遺骨ありたり

五、一握の米をばらまきサラウェットの餓死せし戦友の御霊慰む

六、祖国より持ちきし水筒をかたむけて骸の上にかけてやりたり

七、山頂に倒れし戦友の頭骸骨じつと吾をみつめ居るが如しも

八、この遺骨吾でありても不思議なし立場をかえて思うも涙

九、疲れはて休めばそのまま凍死せし戦友の屍は躊躇ししまま

十、湿原に足をとられて死につきし戦友の屍を探しまわりぬ

十一、ハモニカで童謡吹けば息つまり吹けなくなりて星空みつむ

十二、サラウェットの満月の夜にハモニカを吹けば戦友らの寄ってくる思い

十三、おちこちと土を堀れども見当らなくラエ野戦病院跡の亡き戦友の骨

十四、薪の上の頭骸骨みな物言はず吾を見詰める炎の中に

十五、我もまた見詰かえては相対す懺悔となりし戦友こそ哀れ

十六、一片の細かくなりし遺骨さへ残さず拾ふ灼熱の中

十七、焼骨の煙は高く昇りつつ流れてゆくはラエ司令部山

十八、遺灰をばサラモア沖に流すべし波静かなる海にいでゆく

十九、ラエ陣地のわが高射砲は草むらに遺鉄となりて今なほ残る

二十、はたちにて死したる戦友は吾が孫に当る年頃吾は祖父の年

戦没者収骨行

第一〇二聯隊 森脇 清治

平成元年度東部ニューギニア戦没者遺骨収集派遣団第二班第二組の一員として参加す

編成は班長白川福一郎（厚生省）、菅野進、藤原繁雄、植木憲夫、鈴木貴彦（日本遺族会）、

京井克幸、徳永博幸、内山和昭（日本青年遺骨収集団）、会川利一、森脇清治（東部ニューギニア戦友会）以上十名である。頭初の計画

は「ビエン」地区「イミダグン」地区の収骨であつたが結果は「ビエン」と「タラワイ

島」に変更された。昭和五十七年に妻と「ビエン」へ慰霊と住民に駐留時の御礼に一度訪ねたことがあり、会川氏も「イミンダグン」「ペリンガ」へ六十一、六十二年と二度訪れられ夫々現地には知人も少なからず、多少の土地勘もあり、聊か心に贅うものがあつての参加行であつた。「シンガポール」經由七月十四日夜基地「ウエワク」に到着、先発者後藤氏より説明を聞く、驚いたことに治安が悪く前途多難を知る、暗雲垂れ下る気持で嫌な予感が走る。取敢ず「ビエン」の収骨一日繰り上げて実施と決る。其の後の計画は「ビエン」より還つた時点決めるとのことであつた。十五日食糧器材の調達。十六日「ウリモ」大草原附近不穏との情報あるも警護の為七名の屈強なボートと同行ホテル川端氏の運転にて強行する。「アングラム」にて、マネージャ「ジョ・ケニイ」氏に舟の手配と「ビエン」附近の労働賃金の相場等を聴き二隻に分乗「セビツク」河を下り「ビエン」に向う。十五時半到着。會長に吾々の来た目的を説明し了解を得る。宿舎及び作業者の協力懇請、宿泊料、賃金等細部にわたり取り決める。設営を頼み白川、菅野両氏と共に千賀氏の資料を携行して知人「トビヤス」、「アグス」の案内で現地調査に赴く。セビツク河に沿つて上流二K弱約二十分行程の処で、第一〇二聯隊第三大隊の埋葬地（四十八年第一〇二聯隊副官大竹謙次氏一行が収骨済）に隣接した場所であつた。現在の状況は埋葬地の上に家屋を新築中と西南側に住家が二軒既に建っており、北側は農園として耕作しており、椰子、檳榔、パンの樹、バナナ、タロ芋等が植付けられていた。千賀氏の収骨された所は雑草が生えていたが比較的綺麗で収骨跡も凹んで確認することが出来た。十七日早朝會長、古老連、収骨地附近の住民、農園所有者を集め今後の作業に苦情が起きない様に会合を開き説得承諾を得る。早速現地に赴き、黙禱を捧げ作業開始する。

會長始め古老連率先協力しての順調な滑り出であつた。程無く、ほとんど土に還つた遺骨発見の引き締る思いであつた。合掌し念仏を称える。収骨が進むにつれ携帯天幕の金具、大切に葉でも入っていたのだらう「アルマイト」の小箱、変形した飯盒の中盒、ボタン、判断に苦しむ小物等が遺骨と共に発掘される。持主の手掛りにと、綺麗に洗うも何も手掛がつかめない。じいっと見詰めていると当時の出来事を話している様で切ない。さぞかし無念であつたらう。はっきり番号の読みとれる認識票二個もあつた。（厚生省に保管）。判明を心から祈る。十八日十九日三十度を越す炎天下會長及所有者の立合いのもと床下も、農園の中も懸命に堀りつくし四十三体を確認収骨した。ほとんど土に還つたのだらうか、千賀氏の報告の遺体数と比較すると少い様に思う。作業終了後第一〇二聯隊第三大隊駐留地を調べに行く。一帯はジャングル化していたが防空用のタコ壺が残っていた。當時を色々回顧す。巨離は約一K位であつた。約十五分の道程である。廿日朝香華灯明嗜好品を供え慰霊祭を営む、読経しながら囃鳴するのみであつた。御冥福を心から念じる。おわつて部落民一同に感謝しつつ十一時乗舟帰路につく、途中一隻のボートの故障、自動車のバッテリー故障（ヘッドライトの故障と気を揉ませながらホテルに到着したのが日没もすぎている。其の夜おそく迄鈴木団長とのミーティングの結果意外にも「トラワイ島」の収骨と決る。治安が益々険悪しているとは云え残念で堪らない。会川氏の落胆振りが特に印象にのこる。廿一日食糧調達。廿二日会川氏始め組主力は「トラワイ島」に出発する。吾々（白川、菅野、森脇）三名は「カイリル島」北側海岸の「コラグルール」に遺骨あるとの情報に基き収骨と調査に別行動をとる。「コラグルール」は断崖の上に在り舟着き場は狭く波の高い時は上陸困難な足場の悪い所である。幸

い吾々は膝下が濡れる程度で上陸出来た。會長「ノンブセル」の言によれば全島収骨済みとのこと擬報であつた。島の東側「ヤビツク」南側「ユウン」を調べるも皆無とのことであつた。帰途「ムツシュ島」の「ビツクムツシュ」に立寄り調査するも島民の答は同じ否であつた。旧日本軍基地跡に行き黙禱を捧げる。今は背丈をこす一面雑木草で曾つての面影がない。掻き分けると墓跡がはつきりとわかる。四十数年前と当時の記憶が走馬燈の如く駐けめぐる。廿三日「トラワイ」に追急す、先発主力会川氏の説明によると部落より西北約一Kの海岸に二体あるとのことと探堀するも発見出来ず、波に浚われたかもしれないとのことであつた。廿四日會長「マックス、トニー」及古老連が部落より東南二K位、元駐留部隊が祀つていた社の石積み跡に案内、この附近と指示した処に四体北向きに並べ埋葬してあるとのこととで一帯を懸命に探堀するも発見することが出来なかつた。他方その場所から三〇〇米西の海岸に二体あるとのことと椰子の根本を数箇所発掘するも報いられず嘆息するのみであつた。廿五日夜明前より目が覚め落ち着かない海岸に立ち手を掌す責任を感ず。一同現地にて慰霊祭を行う。大地にひざまずき読経し、いたらざるをわびる。十時島をあとにする、未練が残る。途中「ワリス島」の第一組と共に基地に還る。廿六日ホテルにて待機。廿七日焼骨準備。廿八日焼骨式が厳修される。永い間の念願が今ここに叶えられて何んと幸せ者であらうか。舍利を白袋に収めながら十八年一月妙高丸にて「ラエ」上陸以来「クムシ河口」、「ムボ」、「サラワケット」、「シオ」、「ボギヤ」、「セビツク河渡河」等終戦に云る迄わかれた戦友の顔顔が脳裏をかすめ胸のあつくなるのをどうすることも出来なかつた。廿九日団長の指示により、白川、京井両氏と共に「テレブ」の先「ムウンジュン」地区の情報確認に赴くも知らぬとのこと

擬報であつた。吾々は折角の機会なので次の部落「スワンム」に至り情報集取することにした。會長「ロベット」とその息子の案内で部落の東南五〇〇米位野生椰子の林の中に二体の場所を確認することが出来たが既に昨日焼骨式がすんでいた為次回収骨と決め、残念ながら未収骨のまま引き上げる。卅日追悼式会場準備。日没「ラエ」班一行無事合流する。卅一日合同追悼式が現地官庁署代表、日本青年海外協力団員、川端氏、ホテルボーイ等の参列のもと厳肅裡に執り行われた。英霊の御冥福を衷心より祈り奉る。夜宿舎附近厳戒態勢がひかれる些か心配であつた。八月一日四時起床、定刻六時各人戦友の遺骨を胸に機上の人となる。二月三日「ポートモレスビー」「シンガポール」を経て成田着同夜九段会館に宿泊す。四日千島ヶ瀬測墓苑に於て厚生省職員に遺骨を引渡し任務が終つた。

念願であつた戦友の収骨に参加出来、しかも最後の駐留地であつた「ビエン」での遺骨収集の出来たことはこの上もない喜びであり感激の極みであつた。然かしながらか心の奥深くに今だに、なにかもやもやした気持が残っている。おそらく生涯消える事が出来ないのだらうか。最後に壮行会、歓迎会に御臨席をいただいた田中會長始め諸氏の御好意と御指導に厚く御礼申し上げます。

平成元年九月記

遺骨収集に

参加しての感想

51D 宇佐美 晃

七月十三日、東部ニューギニア遺骨収集団サラワケット班の一員として成田を出発し十四日朝ポートモレスビーに着く、間もなく「ラエ」に向け乗継き同日到着翌日よりの行動準備する。

十五日アベン部落へ、この村は四十六年前サラワケット山に向けて出発した最後の村であった。二千米位の山中にある村なので寒さを感じた、サラワケットの頂上が目前に見ながら拝礼すると涙が流れ声をあげて泣く。餓死した多くの戦友が良く来て呉れた。早く日本へ連れ帰ってくれ、と集まって来る様に思えて何時までも手を合せて瞑想する。

七月二十日山頂には雲一つない晴天であり頂上に向った。四十六年前には二十日間ほどかけて登ったと記憶している四千三百米の頂上の平地まで、今日はヘリコプターにより十五分程で着いた。

附近を見渡していると戦時中に通った場所が思い出される。あの川もこの滝も、昨日の出来ごとのように思い出された。

近くに野ざらしのまま靴をはいている遺骨である。死の転進行路で力つきて果てた戦友を想うとき声をあげて泣かざるを得なかった。経済大国世界一という日本がなぜ今日までこのように放置していたのであろうか、怒りと悲しみが頭の中を駆けめぐる。今、日本に連れ帰るからと云いながら日本より持つて来た水と酒を吞ませタバコもすわせてあげ一時的に供養したのである。

本心に申さない！生き抜いて帰国した我等戦友にも責任があると思つたし、自分も此処で死んで亡き戦友と一緒に焼骨して貰つても良いような気持ちになった。

山を降る時、来年も必ず来るから残されている戦友達よ待つていて呉れ、と手を合せて心残すのみであった。私が最初に合つた戦友への想いでありました。



平成元年度

遺骨収集事業に参加して

独立工兵三十六連隊 會川利一

私の水い間の念願でありました。

ウエワク及びビリシガ等の山南地区取骨と部落の子供達にも逢えると二重の喜びでした。

七月十六日二組の第一の予定地ビエンに向くウエワクを出発アンゴラムに到着緑にかこまれた大河セビックを見たとき

遠い北支中国の黄河を想い出した

共に無念の思いで異国に散った亡き戦友達のことを脳裏をかすめた。

私共独工三六部隊はハンサよりウエワク迄海上輸送のためセビックと接したのは初めてである。

アンゴラムよりモーターボート二隻にてビエンに向う。

到着後宿舎及び明日より現地作業人員の交渉中、部落の若い人達が作業予定地の人家と農園の補償金の要求があり夜になりすべて解決した。

十七日より作業が開始されたが土質の関係で土に還える寸前の状態のため現地人の感にゆだねるより方法なく四〇箇所発掘するも午前八時午後五体の様な進行状態である。

十八日 午前五体 午後六体

十九日 十三体

二十日早朝現地で慰霊祭を行い九時二〇分向きのモーターボート二隻にてアンゴラムより車にてウエワク帰着二十時

二十一日休養と明日の準備

二十二日ビリシガ等山南地区の状況悪く危険のため中止予定変更ワリス及びタライ島に途中一組、ワリスに下船後タライ島に向う到着後宿舎及び現地人の作業人員等完了二十三日日曜日のためボーイ教会礼拝のため

十時三十分来る島西海岸ガジマル林ヤシ林等発掘するも発見されず。

午後は古老の案内で島の中央ジャングル内の宿営地跡を発掘するも発見出来ず。

二十四日発掘するも発見されず。

二十五日早朝現地で慰霊祭を行い九時十五分ボートにてワリスに向い一組乗船四時二十分ウエワク帰着

二十六日待機するも状況好転せずビリシガ等山南地区の取骨を断念やむなしとのこと。亡き戦友と共に祖国に帰る事が出来得なかったのが心に残ります。

ニューギニアの地をはなれる時又迎えに来るからなと心に誓い手を合せ折るのみでした。私が現地に感じた事は派遣団員現地の皆様の一致協力にもか、わらず成果が上らなかつた事実余りにも四十年の歳月が永かつたと痛感致しました。

尚現地状況のゆるすかぎり早急に発掘作業の出来得る様期待致します。

第七回東部

ニューギニア遺骨収集

ワリス島の収骨を終りて

第二十師団歩兵第七十九聯隊

福家隊 園田 定

平成元年七月二十二日、三泊四日のワリス島遺骨収集出発の日である。

ウエワク港を午前九時出発の予定であったが船の都合により十時五十五分発となる。

ワリス島迄の所要時間は約四時間から五時間程度の航海とのことである。小さいディーゼルエンジンに乗せた定員約二十名程度の舟である。当初ワリス島、タライ島の収骨は第二班一組の担当になっていたが、国内状況の変化により、二班一組ワリス島、二班二組タ



合同慰霊祭受付で参着を待つ

ラワイ島と収骨編成の変更となる。

ウエワク海岸、洋展台を後方に見ながら一路ワリス島に向う、右にムッシュ島、左にオーム岬、バス岬と進む約一時間程度航行した附近で左前方に「イルカ」の大群我々の進行方向に遊泳中を発見す。私はその時あはれ「イルカ」の大群でなく亡き戦友の一人一人が、「イルカ」に変身し大群となり友よ、よく迎えに来てくれたワリス島はこちらだと道案内をしてくれているのではないかと錯覚が起き亡き戦友を想い浮かべ感無量であった。

ワリス島、タラワイ島には数十名の戦友を埋葬していると聞きおよんでいる。私の所属していた歩兵第七十九聯隊も故納富大尉以下七名の戦没された島である。島に駐屯していた部隊の戦友が埋葬した島であり都合よくくと多量の遺骨収集が出来るのではないかと期待もし又収骨する箇所より戦友名の遺品も堀出しが出来たなら遺族の方にお返し出来るのではないかといろいろの考えを新たにしている内にワリス島に到着す。十五時十五分である。島には棧橋がなく舟は海岸線の五十米手前附近に停止し「カヌー」と小舟が迎えに来て上陸をする。島のナンバー2、ミスター、マイケルと宿舎の交渉をし海岸近くの軒を借用しここをワリス島に於いてのキャンプ期間中の本部とする。

滞在中の食事は自炊である。夕食の準備に取りかかる、オーストラリア米と缶詰類、パイの青い実で味噌汁も作り昔を思い出す。

翌二十三日（日曜日）収骨時に必要な人員の雇用の交渉をするも、彼等は日曜日は一切の仕事は休んで教会へ礼拝に行くとのことであり、明日の収骨作業は我々団員のみにて収骨をする。

七月二十三日（日曜日）午前六時二十分教会の鐘が鳴る、静寂を破って鳴る鐘の音のなんと美しいことか、静かな夜明である。

神父様始め信者の方が一堂に集りお祈りをしておられるのであろう。この島に眠る亡き戦友も毎週鳴る教会の美しい鐘の音を聞きながら望郷の念にかられ地下より想いを祖国日本へ走らせておられる事でしょう。島全島と海岸線又ニューギニア本島迄美しい鐘の音が響いているのではないだろうか。

私は長崎市に在住しておりまして長崎市は教会の多い地域で鐘の音はよく聞きますが、こんな美しい鐘の音は初めてであった。お祈りをして住民の方は地下に眠る亡き戦友の為に合せてお祈りをしておられるであろうと信じながら、教会は我々のキャンプ地より五十米先の丘の上にあった。

埋葬された遺骨は一日も早く集骨し祖国日本へ奉持、帰還せねばならないと思う。集骨については根気よく搜索をして一体でも多く収集出来ることを念頭に置きながら決意を新たにしたものである。

二組に別れて収骨作業を始める。私達一行は上陸地点の反対側のカピラル村へ行き一体の収骨をする。この海岸にはまだ遺骨があるとの住民の情報により午後より再度カピラル村に来ることとする。この海岸一帯は昔ジャングルで今は海水が来て浅い海岸になっているとのことで午後海水が引いた処を収骨する。再度現場に来てみるも潮の引いたあとには砂と珊瑚礁でありとても堀れる状態でない四十余年の風雪の流れであろう前方は青々とした海であり、あきらめてキャンプへ引上げる。

後藤戦友は別の処から一体収骨しておられる。

教会の庭にも埋葬してあるとのことと神父さんをお願いして庭を堀らしてもらったが遺骨は出てこなかった。

年齢五十歳位の現地人「チャーイ」「エンルーソニーム」兩人から、稲葉キャプテン、岩本（横浜在住）桐山、桑原、杉山（台

湾）島中友人であると日本語で話し我々が島に来たことを非常に懐かしかった。ライター、タバコ等を与へ当時のお札を延べる。次アングマオ部落に埋葬ありとの情報により収骨に向う一時間程度でジャングル及び海岸農園を通りアングマオ部落に到着この地は前方にタラワイ島が見える所である。海岸より三〇米ぐらいの処に爆弾の落ちた穴あり、ここに埋葬してあるとの事で一米ぐらい堀り下げるも遺骨なく別の場所を堀ってみるもそこもなし現場にて、線香、ローソク、タバコ、お菓子等でささやかな慰霊祭をして引上げ本部と合同で収骨作業に従事することとなる。

収骨作業場所はワリス島上陸地点より三十米近くの土手の近くを堀る。珊瑚礁の為発掘作業に手間取り苦勞する。数ヶ所堀って発見出来なかったが作業中の土手の先の方に少し砂地があり、そこで遺骨発見、この附近一帯に埋葬してあるものと確信をもつ。砂地を海岸道路の方向に堀ると多量の埋葬遺骨が出てくる。道路を「形に軒下まで堀る、家の下にも埋葬してあると思われるがそこまでは堀れない残念であるが仕方がない。こんな道路の下に埋葬箇所があるとは驚きである。

ワリス島に於ける収骨合計二十九体であった。今回発掘した場所は当時は海岸広い砂浜で家屋もなかった処と思われる。現在は彼等の道路となっており埋葬されている遺骨の上を毎日歩いていたことになる。なんと悲しいことであろう。現場を見ている内に、残念さ、無念さ、情なさ、一度に「せき」を切つて涙があふれ出、嗚咽と変る。何と無惨なことではないだろうか。もっと早い時期に数多く収集が実施されていたら、こんな結果にはならなかったと思う。祖国の安泰を願う家族の幸福を念じ無念の涙を流しながら戦没した戦友の遺骨をこのま、放置してはおけません。

家屋の下に数多くの遺骨があると思われた。一日も早く収骨されることを願うものであります。

海岸沿いのヤシの木、青い海、白い雲、熱い砂浜今は静かな絵に書い様な風景である。このニューギニア島に於いて世界戦史上類のない地獄のような死闘が三ヶ年余も続けられたとは誰も想像しないであろう静かな島である。

今回の遺骨収集団に参加させていただき私も数ヶ所で慰霊の為の般若心経を読誦しましたがその度に涙が止らなかった。私の心は……その時……いったい何を感じ感涙したのであろうか。あの純粋な姿を思い出したのである。

戦没した戦友の死こそ昭和のすばらしい礎石であったと思う。今の日本ではその苦勞の上にあらをかりて、国のことを忘れ己のことだけ考え、私利私欲に走り、自由奔放な生活をしている。この物質豊富な中でもまだまだ足りないと不平不満をいっているがこんな生き方をしていて、いずれツケが廻ってくると思う。こんな物質至上主義の現代日本人の心を救えんとしたら、南の島々に散華された英霊以外にないと思う。純粋な気持で国の為に盡くされた戦没者英霊の眠る海に、山に、野に出かけ慰霊巡拝することがこれからの日本人の生き方を教えていたただける唯一の道だと私は思う。

地下に眠る多くの戦友の遺骨が一回でも多く一日も早く収骨される事を願う者であります。亡き戦友の御霊の安らかなる事お祈り致します。

我が胸にだかれて帰らん亡き戦友よ

遺族まつ祖国は孟蘭盆の月

合掌

ラバール ニューギニア 陸軍航空部隊戦没者合同慰霊祭

ラバウル・ニューギニア航空部隊会

副会長 松井 正治

本部隊会の合同慰霊祭も本年を以て第14回目を執行する事が出来ました。

東部ニューギニア戦友会の傘下にあつて、合同で実施した頃からもう十数年を経過したわけですが、当初毎年か、隔年かと実施年の決定には論議が行なわれ、結局主催事務局が労を厭はず、会員の身になって、来会者の多寡に拘らず毎年実施することに決定されたものであります。本年は去る11月12日(日)で

前日より引続いての稀に見る好天気に恵まれて、午前九時半の世話人集会、十時の受付開始と共に陸統と会員が参集せられて、十一時の社殿控室集合までの間、三々五々と樓の樹の下で、木の間もれの暖かい陽差しを受けながら、久闊を叙し、四方山の話に打ち興じておられました。会場の都合で合同慰霊会の出来ない我々にとってはこの時間の話し合いは、誠に有意義であり、価値あるものでした。

そして毎年行なっている為か、部隊の異なる者も顔見知りとなり、楽しみに挨拶を交はす姿が随所に見られました。尤も航空部隊は特に飛行部隊の者は作戦の関係で、数多くの関係部隊に、整備、補給、給与等々を受けているので、旧知の者も多い訳であります。

午前11時、社殿控室に全員集合、代表世話人梅田春雄に依り式の進行が進められ、会長に替つて副会長近藤又一郎が挨拶を行なつた。(後でわかつた事です)が衣笠駿雄会長は体調すぐれぬま、横浜の自宅を出発し、蒲田迄来た所、発作を起し、救急車にて病院に向われた。次いで実行委員長仲村進が本日の行動概要の説明をなした。

12時を少し過ぎて総勢二百二十四名四列と

なつて拝殿に昇り、神官の進行に依り、委員長次の如く祭文を奏した。

謹んでラバウル・ニューギニア方面陸軍航空戦において、散華されました英霊に申し上げます。

顧みれば、今次大戦の開戦以来48年を経て半世紀になろうとしております。時は空しく幽明を隔てておりますが、昔を偲び追慕の情は益々強まる許りであります。

本年は元号も平成と改まり、日本は例を見ない経済的発展を遂げました。しかし国内事情は従来にない憂慮すべき時であります。

靖国神社例祭に参拝する政府高官の心構えも、私ども戦友、遺族と致しましては、誠に残念でなりません。私どもは国のため殉じられた英霊の死を悼まないような民族にならなくてはなりません。

今後とも平和を尊重し、また如何なることがあろうとも皆様のお祭りは子々孫々に至る迄続けたいと思ひます。

どうか御霊が安らかに鎮まりますことをお祈り致します。

終りにこの上ともに我國の将来と、御遺族の上を御照覧下さることをお願い致しまして追悼の言葉と致します。

16億8千万円をかけて改装された社殿は、旧来の荘重さを失なう事無き様行なわれたものの、御神鏡を始め飾金具等はキラビヤに光り輝き、いらかの瓦は艶やかでありました。暖かい陽光の射す中庭を通つて本殿に昇り御遺族代表と共に玉串を奉典し、拝礼、柏手を仕りました。従前よりいくらか広く感じられました。

参拝終了後は自由解散となりましたが、境内に残つて、遅参者の受付及び諸整理をしていた横山竹二副委員長、平川義夫事務局長、市川正之吉、松井正次副会長等は、異常なく進行せられた事を確かめ、後は本間正七、中垣国男委員に依り、千鳥ヶ淵墓苑の自由参拝の献花その他の面倒を見てもらいました。

部隊毎に懇親会を催し交歓を致しましたがその前に新装の社殿を背景に記念撮影をするものもありました。

部隊員が少なくて会を持ってない者は本部署事務局で受付けて、最寄り部隊に合流して懇親にかわり有意義な一日を過ごされました。しかしその設営をする者の努力も大変であつたやうで、皆年一回の大切な行事と思つて克々努力せられたやうです。

境内には毎年の事ながら11月初頭は七五三のお祝ひがあり、可愛いらしいお兄さんや、着飾つた母親達の姿が見られ、平和な日本を象徴するかの様でありました。又紅白の献餅を配る奉仕会の人々や、英霊を守る会の方々の活躍する姿が見られました。

本年の行事もこうして無事に終了しましたが、当部隊会では先に出版した戦誌「幻」に対する問合せ等に対処するため、有志を以て幻会をつくり、対応に遺憾なきを期して居りますが、このメンバーは年に数回の会合を持ち、その間各部隊会の連絡やら、通常業務を整理し、慰霊祭等には実行委員として活動して居りますので諸行事は円滑に行なはれて居ります。然し、どこの戦友会も同じとは存じますが、役員、会員共高令化して参りますので、だんだんと運営が難かしくなつて居ります。

今後はご遺族の方々のご協力を仰ぎ、慰霊行事の永続を計らねばなりません。慰霊巡拝旅行も同じ悩みでございしますが、それについても、遺骨収集が完全に終つて居ない事は誠に



架橋されている坂東川

に残念な事と存じます。

何れにしても今後は各戦友会間の連絡を密にし、諸問題の解決に協力し、且又国家社会の為に少しでもお役に立つよう努力しようではありませんか。私見ではございすが、地球環境の悪化の問題、UFO等、宇宙間の問題等、焦眉の急とされますのに、我が国の政治の在り様等、誠に遺憾な事でござい

ます。ご英霊の御冥福を皆様のご健康を祈つて、筆を擱きます。

これからの現地慰霊

四十一師団会 梶塚 喜久雄

バブアニューギニアにおける日刊英字新聞ポスト・クーリエ紙十月十日号の記事の中に、東セビック州政府の新しい政策として、「連年の項目が列挙されていたが、その中に「戦争の遺品、遺骨の調査又はその収集を行うためには、州政府の審査を受けたうえで、その許可料として、五〇〇キナを支払わなければならない」と規定されており、啞然とした。

これは、明らかに日本人を対象としたものであることは、今更論を俟たない。何故なら参戦各国のうち遺品、遺骨収容が終っていないのは、ひとりわが国だけで、他の関係国では、戦後このような事例を見られないことであるとともに、もちろん現地の住民のそれは、彼等の既往の生活慣習から考えても死者を放置することなどあり得ないことであるからである。

しかも遺骨の収集に関しては、バブアニューギニア国の主権を尊重して、その都度同国の許可を受けたうえで実施することが建前であり、しかもバブアニューギニアにおいては、一般個人に対しては、原則としてこれを許可しない方針を堅持して現在に及んでいることを考えれば、この新政策は、明らかに日本政府を対象としたものといっても過言では無いのである。

これに対して、わが国の外務省や厚生省の事務当局者は、ひとしく「相手国の方針がそうであるならば、もちろんそれに従って許可料を支払ってでも、本来の目的である遺骨の収集を行うことになる」と、すなおに相手国の方針には従う旨を表現しているが、当然のことであろう。

一方戦争の遺品については、オーストラリアの委任統治時代からバブアニューギニアの

独立初期の頃は、既にわれわれの占有を離れて同国の財産となってしまうもののかかわらず慰霊巡拝のついでなどに勝手に同戦場に放置された鉄帽、水筒、飯盒などを始め飛行機の残骸などの兵器の類いまで、持ち帰ったものであるが、これは、たまたま同国の態勢が不整備な状態に便乗した主権侵害といわざるを得ない。やがて同国が独立し、国立博物館を開設するに及んで、はつきり、こうした戦争遺品類の持出し禁止を打ち出して、従来のような勝手な行為は、許されなくなつたのである。

ともあれ、今回の新政策について同州政府の高官は「州内随所に旧日本兵の遺骨は、随時見られるが、現在では、一か所にかたまつて発見されるといった事例は、殆んど無くなっている。従って今後は、日本政府としても遺骨の調査、収集等の申し入れは、減多に無いのではないかとすればこの項目は、日本側としても何等支障無いものと判断される」と言っているのであって、言い換えれば、この点から財政収入を期待するわけでも無し、日本政府を殊更牽制するためでもなく、一連の施策の一環として盛り込みに過ぎないと言えなくもない。

しかし事は、そのように単純に割り切れない多くの要素を含んでいるように思われて、何となく嫌な予感めいたものを感ずるのは、私だけだろうか。

即ち一は、東セビック州政府がこうした施策を採用し、これを中央政府も黙認するとなれば、他の関係各州即ちマダン州、モロベ州、西ニューブリテン州、マヌス州、ノースソロモン州、オロ州等においても、当然右へ倣へということになるであろうという点である。もちろんこの点については、それほど問題視する必要は無いとは思ふが……二番目は、それこそ最も危惧される問題であって、州政府の単純な考え方が一般大衆に

戦友会員の著書の目録について

基部隊会長 岡本 隆久

戦友会報への寄稿を思い立って色々思案する中に手許にある戦友各位の著書を開いて見ました。どの本を取っても一度開くとついそれに没入して時の経つのを忘れてしまします。あの戦域で作戦に参加した人の気持が直に伝わって感情の共振を起す為です。

- 第18軍司令官安達二十三中将に関する資料集 田中兼五郎編
- 留魂の詩 堀江正夫 (昭57)
- 阪東太郎 吉原矩(昭40)——基兵团関係2部隊史等
- 〇二部隊かく戦えり 歩66聯隊誌(昭56)
- 基部隊作戦給養行動記録 岩田重雄(昭59)3体験記等
- タイヤボンボン飯塚栄地 (昭40)
- 撤退 齊藤芳郎 (昭50)
- 思い出の戦塵誌 日比野悟 (昭55)
- 嗚呼ニューギニア戦 山田 佐(昭60)
- バブアニューギニア戦追憶 岸寛(昭62)
- ニューギニアの戦い(秋葉太郎遺稿) 鈴木元明(昭63)

1作戦全般
●南十字星 吉原矩(昭30)——軍全般
●バブアニューギニア地域における旧日本陸海軍部隊の第二次大戦間の諸作戦 田中兼五郎
及ぼす影響である。

- 雑誌 丸(地獄の戦場 ニューギニア・ピアク戦記) (昭61)
- 一応市販又は頒布されたものの例をあげても右のようですが発行部数は限定されており多くのものは今では再入手不能という状況です。又例えば会員誌である齒科ペンクラブ(昭50)に●病院船水川丸 篠田増雄というような寄稿文の形のものがありません。

特に慰霊団を頻繁に迎える地域に在っては、だんだんと小利口になって、持つて生れた素朴な人間味溢れる隣人愛を忘れて、すべてに打算的となり、慰霊祭を行う場所を提供するのにも一定料金を要求し、甚しいのは、村落内への立ち入りによるさへ料金を要求するような傾向が顕著になりつつある状況のなか、州政府が遺品、遺骨の調査、収集に対して公然と料金を徴収することにしたことは、一般大衆にとっては、恰好の口実を与えられたようなものである。折角善意で場所を提供し、われわれの心をすなおに理解して協力してくれた一般大衆の心奥に「金のなる木」的複眼を与えてしまふことになり兼ねない。それこそ私共が営々として築いて来た友好親善の途を根底から覆して行くもの以外の何物でもない。

これからの慰霊巡拝の折、私共は、こうした前提を充分心して彼等に接し、彼等が本来持つている素朴な人間性を損うことの無いように、私共自身の人間性を存分に発露するよう心掛けるべきであろう。

基部隊編成時から全作戦を通じて指導され、

戦後もわが基友会を結成し育成される等一貫して尽力されている鈴木元明参謀は八十歳を超えて尚努力されています。昨春秋葉太郎大尉遺囑の原稿を辛苦完成して前出のように刊行されましたが、今又「ラエ周辺の戦斗」サ

戦争を平和な時代に思う。

ラフケット越」についての執筆に心血を注がれていると伺い全く頭の下る思いです。私達も気力体力の存する限りそれぞれの持場で頑張っていきたいと存じます。

独立工兵第十連隊（船舶工兵第五連隊）

戦友会代表世話人 鶴飼 義信

連隊は昭和十二年八月揚子江川沙鎮上陸戦斗以来、呉淞鎮、杭州湾上陸戦斗、南京攻略揚子江遡江作戦、安慶、鄱陽湖、漢口上陸作戦、龍門島上陸作戦等、中南支の重要作戦に参加し、数々の感状、賞詞を授與されました。

的、第一回慰霊祭を行い、戦友会を結成し以来四国四県を中心に関東・関西・九州と毎年引きつづき慰霊祭を行って参りました。東部ニューギニア戦友会主催の靖国神社に於ける慰霊祭にも参拝を共にして参りました。

大平洋戦争に於いては田中支隊のアバリ上陸、管野部隊がザレ上陸、奈良兵団マビラオ上陸、第十六軍主力バンナム湾上陸コレヒドール上陸作戦、又遠く離れたグアム島、ラバール上陸作戦コレヒドール島作戦に参加し十七年以降、連隊主力をあげて東部ニューギニア地域、ラバール・ラエ・サラモア・ゲンピル海峡・ツルブ間とブナ・ギルワよりウェルク西部の海上の間に於いて頼み甲斐ある水上部隊として活躍し、武功天上に達する感状をはじめ多くの感状、賞詞等を授與されました。

現地へ、四十四年、四十八年の遺骨収集団には白川清広氏、鶴飼義信を代表として派遣し、以来戦友、遺族も数回慰霊して参りました。パプア・ニューギニア友好協会にも関係し、應分の協力をして参りました。又世話人各位の協力のもと柴田戦友の積極的な御努力によって部隊出発以来戦戦までの実状を航跡として出版し御霊前に供へる事が出来ました。誠に有難い事と感謝いたしております。

その間水く屍、苦むす屍と一三・一八柱にのぼる英霊を生じ、多数の傷病者を出し、誠に痛恨の極であります。

日本は明治以来開国して世界の各国と交わる内白人国家の文化文明に眼くらみ、彼等の白人帝国主義を模倣して自国の繁栄の爲には他国の迷惑を考慮する事なく利用し、侵略する事を悪とも考へず偏狭な愛国主義で国民を指導して来た。事が戦争の発起した原因であります。又軍部も戦争と合理的な科学的な総合的な戦争として考へず、忠君と称し、死を名誉なものとし捕虜は不忠、一家の恥と人間の命をもつて戦勝の多くの手段とし、極端な命令主義をもつて戦争を指導した事である悲惨なる戦場をおこした大きな原因であると思

特にニューギニア戦に於いては戦つては敗れ、又退いて戦い敗れ、食うに糧なく、打つに弾なく医療なき悲惨の極、極限の戦況下に敢闘、ついに敗戦を迎へました。参戦十五万人にのぼる内生き残つた者は僅かに一割足らずと言う事でありました。

人類は余り多く自然界を損消しない様に他の生物と調和のある生き方をせねばなりません。集團しなければ生きて行けない人間の基本的な問題は何でしょうか。

私達は昭和四十二年二月十一日、建国記念日創始のよき日に母隊工兵第十一連隊のあった香川県善通寺市の護国神社に於いて野崎元連隊長を先頭に七十名の戦友相集まり、感激

人類的に豊かな道であると思ふ。こうする事が戦友に答える道であると思ふ。



戦友達が書いた戦記紹介

○東部ニューギニア戦線

―戦場を生きた軍医の記録―

第十八軍司令部猛 鈴木正己著

一、八〇〇円

○海軍陸戦隊ジャングルに消ゆ

―栄養失調で右眼を失明した陸戦隊軍医の実体験記―

第二十七特別根拠地隊 渡辺哲夫著

一、五〇〇円

○幻 陸軍航空かく戦い、かく潰ゆ

―ニューギニア航空戦(洋・真・襲)の実相―

ラバール・ニューギニア陸軍航空隊

戦友会編

三、八〇〇円

○東西総説 ニューギニア戦日本の現代史に思う

―第十八軍のアイタベ作戦 第二軍を救う―

元第二軍 兵技中尉 内藤勝次著

一、二〇〇円

―満州事変・支那事変と三度参戦―

〇疾風に勁草を知る

歩兵第七十八聯隊 山岸福次郎著

二、〇〇〇円

190-12 武蔵林山市三つ藤一八二二三

190-12 発売元 戦誌刊行会(四五六〇三番)

福家 隆第二十師団残戦友会世話人

〇慟哭の彷徨

102 i 古宇田義次著

水戸市酒門町四一三八一四

三、七〇〇円

〇死のサラフケット越え

2 F L 浦部弘著

藤岡市三木本九二

一、八〇〇円

〇地獄の戦場追憶記

3 F L 岩田 亀作者

前橋市昭和町二一〇一一一

一、五〇〇円

慰霊祭と戦友会報に

ついでの一提言

第二十師団 福家 隆

一、はじめに

東部ニューギニア全戦友会の慰霊祭も来年第八回目になるが、この次に予定される平成七年には、戦友の最年少組でも、七十五歳前後に成るわけで、開催するにしても恐らく参加者が、激減するであろうから、来々が最後では無いまでも、その後大きく期待を寄せることは無理であろう。

そこで、来年の慰霊祭を、従来規模のものとしては最後の的に考えて、それにふさわしい意義を持ったものにする必要がある必要があるのではなからうか。

また、戦友会報も予算その他の面から考えて、これ以上余り出しようとは考え難いのでこのような背景を考え合わせながら、次のような提案をする次第である。

二、今度の慰霊祭のメイン・テーマを御遺族への奉仕に置いては？

あの地獄の戦場で三年の終始に亘り純正な統帥を貫かれ、遂に十余万陣没将兵の「信と愛」に殉じ、第十八軍の歴史に最後の光輝を加えられた安達軍司令官が、生き残った我等に託された最大のご遺志が、御遺族への配慮にあったことは、ご高承の通りであるが、我々生還後、国全体の、あの混乱と貧困、無秩序の中にあつては、お互いに如何とも術無く、省みて心ならずも、十分に果たせたとはいえないのではなからうか。

そこで、来年の慰霊祭のメイン・テーマをここに置き、今のうちから戦友こそつて、これに取り組み、ささやかなりとも奉仕の実を挙げることを提言する次第である。

(1)、何を奉仕するか(御遺族が望んでおられることは何か)

①、「いつ」「どこで」「どのようにして」を知りたい。

我々が一番良く承知している通り、御遺族方には、戦没者のご遺骨は勿論、その最後が「いつ」「どこで」「どのようにして」さへ未だにお分かりでなく、その模索を重ねておられる方が少なくないどころか、大部ではなからうかとさえ思われる。

勿論、今となつては、その全てが分かるう筈もないが、反面その中には、組織的に調査をすすめれば、ある程度判明出来る可能性のあるものも、決して少なくはない筈である。

ところが、多くの御遺族方は、旧軍の組織など余りご存じなく、まして、戦時中は、部隊名さえ秘匿したため、固有部隊名もご承知でなく、ただ、模索を続けて来ておられる向きが決して少なくないことはご承知の通りである。

そこで、この際、我々の方から積極的且つ組織的にこれに協力申し上げることを考えてはと提言する。

即ち、現に、厚生省援護局資料調査室(☎〇三二五〇三一一七一一内線三四七〇)でも近年は、最少限、本籍と氏名さえ分かれば、電話でも、所属部隊名、戦没年月日、場所程度は、即答して貰える態勢が出来上がっているのだから、戦友会で、全国紙、地方紙に限らず各新聞の戦友案内等の無料掲載欄をフルに活用して、組織的な調査に積極的なご協力を試みてはどうであらうか。

こうして所属固有部隊名が分かれば、その部隊の世話人に連絡を取り、それによって、所属隊まで分かれば、その隊の現存者を辿り、さらに詳細に調査を進めることも出来る訳である。

註：私は、仕事上特にご遺族様方から、直接ご連絡を戴く機会が多く、このようにしてご協力させて頂いているので、特に痛

感する次第である。

(2)、どうして、遺骨も帰らず、しかも、戦死年月日やその場所や、最後の状況が分からないのか？

これは、関係御遺族一般に共通してご理解に苦しんでおられるところであらうが、これを十分に御納得戴けるように御説明するのは容易ではない。

百聞一見にしかずで、出来ればニューギニアに慰霊巡拝に行つていただくのが、一番であるが、だからと云つて、これをどなたにも簡単に御勧めするわけにも行かない。

そこで、これを御理解いただく一助として、東部ニューギニア戦線全般、並びに該当部隊の關係した戦史や戦記をご紹介して、読んでいただいたり、実体験をお話申し上げたりする等、当時の情報を出来るだけ積極的に御提供申し上げる機会と方法を講じて、ご理解を深めていただくほかはない。

(3)、このような背景の下、更に来年の慰霊祭は出来るだけ多くの御遺族をご案内して、受け付けにも御相談コーナー特設したり、特別に時間を取つて、会長等による全般状況の御説明や御質疑応答の時間を設けたりすることも、是非有つて欲しいものである。

註：私が接したある御遺族は、あの慰霊祭を国で行つてゐるものと誤解され、何故遺族に案内が無いのであらうかとさえ、感じて居られた例もある。

こうして、せめて少しなりとも、故安達將軍のご遺志を御遺族にお伝えし、また、その御遺志に少しでも添うべく企画し、今のうちから、広くこれ等の事を御遺族に周知するよう図りたいものである。

三、戦友会報の総括版発行について

御遺族へのお世話こそ、必ずしも十分に行えなかったが、戦友会としては、これまで、この慰霊祭をはじめ、遺骨収集、慰霊巡拝、

慰霊碑の建立、会報や戦史の発行、等々、色々な事業努力を重ねてきたわけであるが、今後会報もそんなに出せるとも思われなないので、この際、これまで戦友会として行つてきた事業努力を総括した、会報の総括版を発行して、まず、我々自身が、これらを総括的に把握すると共に、これを末長く、広く、御遺族様方に配付申し上げる努力を続けて、これを通じて、少しでも、状況の御理解促進に資したと思う次第である。

四、おわりに

このように、来年度の慰霊祭を目標に、従来個々に行つていた御遺族への配慮やお世話を、これを契機に戦友会挙げて積極的かつ組織的に展開する為には、出来れば企画委員会的なものを設けて、実行可能且つ効果的な企画を練り、慰霊祭をより意義深いものとすると共に、

東部ニューギニア戦友会の事業活動の総括を要約記録して、これを末長く、幅広く活用したいものと念願してやまない次第である。皆さんの英知を結集して、東部ニューギニア戦友会の最後を飾ろうではありませんか。



ウエワク半島

台湾・高砂族に「日本」を見た

◇ニューギニア戦線から41年、命の恩人と再会◇

☆ ☆

物心両面で撤収軍支え

昭和六十年二月十日のことである。私は空路台東へと向かっていた。ある現地人に会うためである。

昭和十九年一月、私は東部ニューギニア戦線における海軍陸戦隊の軍医長であった。部隊は濠洲の攻撃をうけ、山岳地帯に入り、一カ月余の転進の末「マダン」で救出されたが、私はマラリア、栄養失調のためやせ細っていた。そのさまを見て、司令部では台湾・高砂族の兵士二人を従兵としてつけてくれた。やがて「マダン」にも敵砲弾が落下するようになり、私は最後の撤収部隊百人を率いて西方へ下ることになった。

心強いことに今回の転進には二人の高砂兵が身近にいる。休憩を命ずるとサツと姿は見えなくなる。帰ってきた彼らの手にはヤシの実、またはパイアがあった。そのうちの一人、日本名宮川忠男氏は歌が上手であった。「宵待草」「赤とんぼ」「花嫁人形」をよく歌ってくれた。兵士らは望郷の念にかられ、共に歌い、明滅する螢の光に涙が光った。

行軍を続けるうち胸までつかる湿地帯に直面した。兵士らは木を抱いて眠った。高砂兵は木を切り水面上に高床をつくって私を寝かせてくれた。二人の高砂兵がいなかったら下痢で衰弱していたこととて、到底助からなかったと思う。先ごろ、私はニューギニア海軍部隊の実情を記した「海軍陸戦隊ジャングルに消ゆ」を発売した。その中でも、こうした宮川従兵のことはしばしばふれた。

一昨年の秋、台湾台東県から一通の航空便

●海軍第八十二警備隊 渡辺 哲夫

を受け取った。差出人は「王曾吟来」とあり、「先生の本読みました。私はうれしきのあまり戦友三人と飲み明かし、渡辺軍医大尉が生きていたぞと何度も叫びました……」とあった。これこそ宮田忠男氏ではないか。四十年ぶりに捜していた命の恩人に心からお礼を言わせてもらう時が来たのだ。かくてその旅となったのである。

☆ ☆ 一家をあげての歓待

台東空港では数人の現地人の出迎えをうけ、車は市外の高砂族世話人の余さんの家の前に着く。そこには三十人近いアミ族の人が集まっていた。この村落にきた日本人は私が二人目であるという。早速ビールで乾杯して宴会となった。代表から「日本は本当に日本軍のために戦った高砂族をもっともと思つて欲しい。一時金も恩給もない。渡辺先生どうかその点を考えて下さい」と要請された。彼らの日本語は実になめらかである。寝もたけなわとなり「宮川、何か歌えや」と言われて歌うその声を聞き、私はアツト驚いた。「待てど暮らせど来ぬ人を、宵待草のやるせなさ……」まさしく四十一年前にジャングルで聞いたあの歌なのである。私は當時を思い、胸がジーンとして思わず彼の手を握っていた。

午後から宮川氏の家を訪ねた。車は東海岸に沿って花蓮方向に一時間余り走る。日焼けした奥さん、色白の娘さんがニコニコして出迎えてくれる。私はその娘さんを見て、再びアツノと驚いた。私がいつも頭の中で描いていた若き日の兵士宮川氏の顔があった。「奥さん。ご主人はあなたとまだ結婚しな

いうち、ニューギニアで私を助けてくれたのですよ。それでぜひ、皆様にお礼を言いたくて来たのです」と言う。と、「この村にきた日本人は先生が初めてです」と答え、私も先生のために歌いますと、「あ、あの顔であの声で手柄頼むと妻や子が……」。「晩に祈る」六番全部歌ってくれたのである。

夕食は娘さんの主人も入って、一つのテーブルを囲んだ。彼女があれこれ考えて作ってくれたそうで、マグロの刺し身、ゆで卵、鶏のあげもの、小魚の煮つけ、海岸でとれる岩のりのスープであった。私にとってこの心のこもった晩さんは街の中国飯店の食事よりはるかにおいしく楽しいものであった。

☆ ☆ 「愛国行進曲、今でも」

その晩、私は台東郊外の温泉ホテルで彼とベッドを並べた。思えば長い四十一年であつた。いつもジャングルの中で落ち葉を敷いて、寝床を作ってくれ、そばで一緒に眠った宮川氏。私が激しい下痢でいよいよ死を覚悟した時、励まし、食べ物を探してくれた人が今、隣にいる。私たちは夜遅くまで話した。「軍医長がああ湿地帯で、これは大切な医薬品だからぬらさないようにと私に預けたこともありましたよ」「私が足を傷めた時、軍医長は大事な自分用のガーゼ、包帯を使って毎日手当てしてくれました。その時の傷跡がこれです……」。

翌朝、空港には五、六人の高砂の人たちが来ていた。その中の一人が言った。「渡辺さん、私たちは日本人のために一生懸命戦いました。今でも何かと集まっては、愛国行進曲、太平洋行進曲、ラバウル小唄を歌って日本を懐かしんでいます。子供たちは時代が違ふよと言います。でも私たちは日本が大好きで、大和魂は今も燃えています。どうか高砂を忘れないで下さい」。その言葉の一つ一つが真実にあふれていた。私は再会を約

して台北へと向かった。

六十一年一月三日、再び台東を訪れた私は宮川氏ほか三人の高砂の人たちと、東海岸をドライブ、数カ所でアミ族の家庭を訪問した。彼らは今、六十歳前後であり、老妻と農耕を営み静かに暮らしている。子供らは成人すると大抵は台北か、高雄へ働きに行くという。住居は箱型のコンクリート建てで、自分で何年もかけてつくるそう、その内部は清潔で、白黒テレビがあった。ニューギニア戦の話になると、目を輝かせて当時の様子を話した。現在は孫を育てるのが一番の楽しみですと語る。

日が傾きかけたころ、宮川氏の家に着いた。今夜は台東のホテルをキャンセルして、彼の家で一夜を過ごすのである。靴をぬぐとすぐに板敷きのホールがあり、その両側に六畳ぐらいの部屋が二つずつ並んでいる。夕食がすむころ、ポツポツと老若男女が集まってくる。奥さんが「日本から先生が訪ねてきたと伝えたら皆大喜びでとんできました」と言う。

家の中は三十人ほどの村民で一杯になった。宮川氏が立つて、私の紹介を始めた。アミ族語で全く分からなかったが、時々私の名前が出てくる。聞いている人は目を輝かせ、時々びくりした顔つきをする。終わって渡辺先生もひとことと言われ、かつて宮川氏に助けられて、現在があることを話した。通訳は六十すぎの婦人がしてくれた。

次いで合唱が始まった。「アイヤ、アイヤ」の声が何とも物悲しい。これは別に意味はなく、踊りの調子をとるためであると奥さんが説明してくれる。やがて踊りの輪が出来、情熱的な踊りが展開する。日本の盆踊りと異なり、腰を動かし、足をすべらし、手をたたき、楽しくてたまらないといった感じであった。

☆ ☆ 「九段の母」の踊りまで
そのうち宮川氏が老婆の格好でツエを手

して現れると、奥さんが「上野駅から九段まで……」と歌う。それに合わせて彼がジャングルの中でよく見せてくれた「九段の母」を踊った。次から次へと踊り続けるアミ族の人たち。最後に白髪まじりの婦人が、日本語で演歌「女のみち」を見事に歌ってくれたのは感動的であった。三時間余、心からの歓迎の宴は実に楽しいものであった。

寝室は天井はなく板敷きに毛布が敷いてあったが、かけぶとんは新品で軽くて温かく、宮川氏ご夫婦の心づくしを感じた。翌朝、激しい雨音に目覚めた。あひる、鶏、豚のなき声が聞こえる。既に昨夜の人たちが数人集まっていた。若い人は勤めがあるので、老人や、赤ん坊を背負った母親らである。奥さんの音頭で、年の始めのためしとして……の合唱が始まった。四十年以上日本と断絶しているのに、台湾のアミ族の村に「日本」があったのである。

パラオ紀行

十八軍司令部 堀江 正夫

○はじめに

私は縁があつて今夏一週間パラオを訪問した。恐らくニューギニアへの中継基地、補給基地であつたパラオに戦争中足を留められた方も多いと思うので、パラオの現状等についてご報告申しあげることとした。

その前に、私は本年七月を以て参議院議員を離任したが、昭和五十二年に立候補以来二期十二年に及ぶ議員在職間、皆様から賜つた格別の御厚情御支援に対し、まず心から御礼申しあげたい。お蔭様で終始健康に恵まれ、国会議員として国の安全保障や旧軍人、靖国神社問題等を中心に微力を尽すことができたことは、望外の幸せであり、感激に堪えない。

○何故パラオを訪問したのか

本年一月昭和天皇の御大葬参列のため訪日したパラオ共和国エディンソン大統領が、一日私の友人の案内で私を来訪した。用件は日本のパラオ共和国に対する経済援助の問題であつたが、青少年時代教わつたという日本語で、真情をこめたお話があつた。

ご承知のとおりパラオは、第一次世界大戦後ドイツから委譲を受けて、日本が委任統治を行つた南洋庁の所在地であり、前大戦中トラック潰滅後連合艦隊の基地となつたところであり、わが南東方面軍の中継及び補給基地であつたところである。また、近在するペリリュー島は、水戸の歩兵第二連隊を基幹とする部隊が、敢闘二ヶ月の後玉砕した地である。したがって、死生と苦難を共にしたわれわれニューギニアに従軍した者にとつて、極めて縁の深い土地に、慰霊の意味も含めて一度訪ねて見たい。かつての日本にとつて、更に特になれど縁の深い、この土地に対する今後の日本の経済援助を考える上で、一度現地の状況をこの眼ではつきり見ておきたいというのが私の思いであつた。

○行動の概要

八月二十一日成田発サイパンを経由して午後グアム着、同地に一泊して和田総領事の案内で戦蹟見学慰霊の後、翌二十二日パラオに着、空港に日系の上下両院議員の出迎えを受け、コロール島の故五島昇氏の東急ホテルに投宿、二十三日は午前大統領及びそのスタッフと、午後は上下両院議員と懇談の上現地視察、同日夕は上下両院議長長の招宴、二十四日はセスナ機をチャーターして、日系の老婦人トヨミさんの案内で、ペリリュー島慰霊の後現地視察、二十五日は大統領所有のネスロ島に大統領と遊行、同日夕大統領夫人手料理のパラオ料理を主体にした日本レストランでの大統領招宴の後同夜離島グアム経由で二十六日帰国した。

○パラオは現在どうなっているか。

一、その概況

前大戦後日本の旧南洋委任統治領は米国の信託統治するところとなつたが、そのうちミクロネシアとマーシャルは既に独立したので、対し、国民投票により非核政策をとつていことが理由となり、現在自治は認められているが未だ独立は認められていない。

パラオ共和国はパラオ本島・コロール島・ペリリュー島・アンガウル島及び附属する無数の小島をその領域とし、人口一万五千名、首府はコロール島におかれており、上下両院で国会を構成している。二十数年間に亘る日本統治時代、二万人が自活できる田畑を開拓していたが、戦後、米国はこの農地を含む日本統治時代の総ての構築物等を破壊し、一貫して米国の経済援助により細々と国としての機能を維持し、国民生活を営んでおり、見るべき産業は全くない。

ただ世界第一等の透明度を有する紺碧の海に恵まれた風光明媚な美しい自然と平和そのもののたたずまいの国であり、この海を目指して日本の若いダイバー達が年間一万七千名もパラオを訪れており、私が投宿した東急ホテルもこの若い男女達で溢れていた。

二、日本人の血が生き続けているパラオパラオでの見聞で特に感銘を受けたことが三つある。

その一つは大統領に代つて出迎えてくれた上下両院の代表議員が皆訛りの少しもない立派な日本語で語りかけてくれ、そしてその名刺を見るとローマ字で書いてはあるが「うえき」「すぎやま」「しやうだ」と云つた日本名であることにまず吃驚させられた。この人達は父親の性をその保継承しているものであり、名も日本名である。そしてこれは単に二世だけでなく、三世にも四世にも広く及んで翌日の議員との懇談会の席上、御殿場出身のすぎやま氏は「すぎやま」姓は現在百人いると云っていた。日本人の血をひいていない何名か

の若い議員もいたが、彼等は私の名は「さぶろう」です、「みのる」ですと誇らしげに自らを紹介していたのも印象的であつた。

日本人の血をひいている多くの人々が今日なお日本の名前を持ち続け、そのことは大きな誇りを持ち、これらの人々がパラオ国内各界で有力者として活躍しているのである。

その第二は、何の装飾もない人で溢れたガランドウの空港ビルの中に南洋神社とペリリュー神社とアンガウル神社の大きな写真だけがその正面に掲げられていたことである。

勿論神社そのものは米国がこれを破壊して、僅に南洋神社の参道入口にその痕跡をとどめているだけであるが、空港ビルは大きく掲げられたこの三枚の写真に、私はパラオの人々の日本に対する深い思ひを感じ無量の感慨を覚えたのである。

その第三は、ペリリュー島の慰霊碑の清掃保存に対する島民の協力である。

ご承知のとおりペリリュー島は歩兵第二連隊を中心とする一万一千名の守備隊が必死敢闘二ヶ月全員が玉砕し、今もその忠勇の魂魄のとどまる、いわばわれわれにとつての聖地である。

戦間により一木一草まで焼け尽され焦土となつたこの小さな島も、全島が既にジャングルに覆われ、僅かな島民によつて芋畑が作られ、粗末な家屋と時間制でしか電気もつかない貧しい生活の中で、平和な毎日を送っている。

この島には日本軍の立派な慰霊碑が三つある。それぞれ茨城県の遺族等と戦友と政府が建立したものである。この三つにそれぞれ詣り、用意した花と日本から持参した酒と線香と蠟燭を捧げたが、それぞれが島民によつて立派に周辺が清掃されていた。勿論関係の皆様から清掃料等をお預けして、その維持をお願いしてあるのかも知れないが、島民の皆さんの好意なしには、このように立派に維持

されることは不可能であると思われ、頭の下る思であった。

前記の、態。ご案内を頂いた、かつてこの島の大酋長であった、流暢な日本語を話すトヨミ女史を初めとする、島民の皆さんの日本に対する思いに感激し、向後をお願いしてきただ次第である。

○終りに

このようなパラオ共和国に、そしてパラオの人々に、今後われわれはどのように対処すべきか。

一人の日本人として、是非ともこのパラオの人々が、平和でより豊かな生活ができるようにしてあげたい。パラオ共和国が立派に自活できるようにしてあげたい。いやしなればならない。いうまでもなく、これが日本人の心であり、日本政府のなすべき政策であろう。

たしかに、従来から日本政府は無償経済援助を続けているが、極めてささやかなものである。単に未開発国に対する援助という枠内で考えるのではなく、新たな発想に立つてこの国に対する援助を真剣に考えなければならぬ。

その意味で私はこの度の視察を基にパラオのために具体的に大いに微力を尽さなければならぬと堅く心に決し、帰国後も些かの尽力をしている所である。

(一、十一、二記)

堀江氏は旧五十一師団、十八軍参謀、元参議院議員

現在は郷友連、日傷連会長、その他団体の要職を兼ねて活躍されている。

戦友会の歩み

後藤 友作

昭和十七年南海支隊の一部と海軍部隊が協同して、東部ニューギニアのラエ及びサラモ

アに上陸占據しブナ地区に進出したのが、ニューギニア戦の始まりであった。続いてポートモレスビー攻略の命を受けた南海支隊は、十七年八月月上旬ブナを發進してオーエンスタンレー山系を越えて、九月中旬にはポートモレスビーまで約四十キロにせまるイオリパイワに到着したのであったが、糧弾の補給が続かなかったこととソロモン方面の戦局悪化などのために、作戦を変更せざるを得ず九月下旬に到りブナに向って撤退しなければならぬことになった。この撤退行動は米濠軍の追尾作戦と砲撃、食糧の欠乏、病魔と連日のスコール等のため苦難を極め多くの戦没者を出した。この作戦に参加した主な部隊は、四国編成の一四四連隊、広島の一連隊、独立工兵十五連隊その他で総称南海支隊將兵であった。

米濠軍の反攻作戦はマッカーサー大將を総師とした反攻軍で、東部ニューギニア、ブナ地区には十一月中旬進攻するに到ったのであった。ブナ地区のおが軍はこれを迎え各地において激戦を展開したのであったが海空軍の支援により圧倒的優勢な米濠軍の攻撃をうけ、各地において玉砕するに及び、昭和十八年一月二十日には同地を放棄し撤退せざるを得なかった。南海支隊長 堀井少將、小田少將、海軍陸戦隊司令 安田大佐(戦死後二階級特進)など多くの高級指揮官達が戦死されていることでも激戦の状況が想像される。

わが軍はその後、第十八軍を(軍司令官 安達二十三中将)新設、東部ニューギニアの要衝に兵力を増強し戦勢の挽回を図ったが、米濠軍は周到な準備と海空の支援のもとに要地を飛石的に奪取する作戦をとってきた。これのため我が軍はブナ地区の撤退に始まり、ラエ、フィンシュハーヘン、マダン、アイタペの各地において死闘を繰り返したのであるが遂に米濠軍に攻略されるところとなった。昭和十九年七月、わが軍は残存兵力を結集

して、アイタペ東方のドリニューモール川(坂東川)西岸の米濠軍陣地を攻撃した(アイタペ作戦)のであったが、米濠軍の逆襲激しく、損害続出するに及び作戦を中止せざるを得なくなり、その後はトリセリ山系南麓の地において、残存全軍が一丸となって死闘を繰り返し、玉砕寸前で終戦を迎えたのであった。

以上の東部ニューギニア戦におけるわが軍の損害は、該地に上陸し参戦した十五万に及ぶ將兵の93パーセントに及び、終戦により内地に生還した人員は一〇、〇七二名と記録されている。

東部ニューギニア作戦

第十八軍関係全部隊

厚生省・戦友会資料より

部 隊		総 人 員	備 考
第18軍直轄部隊(猛)	102部隊	三七、八〇一名	一、終戦後生存者として軍が掌握し内地に帰還した 人員一〇、〇七二名
第20師団	(朝) 15部隊	二三、三八五名	二、軍主力復員後、逐次帰還したもの
第41師団	(河) 14部隊	二二、〇二〇名	
第51師団	(基) 16部隊	二八、八八八名	
航空 部 隊	34部隊	一四、一〇八名	A、ホーランジア方面
船舶 部 隊	15部隊	一〇、六〇六名	B、抑留者として
海 軍 部 隊	32部隊	約 八、〇〇〇名	C、戦犯及び証人として
ブナ方面部隊	26部隊	一四、八九八名	一、補充要員として海上輸送途中に海没したもの、病還、転属等は含まれない。

悪性熱帯病等による死没者等で遺体は文字通り水つく屍、草むす屍の情態そのまま、戦場に残置するところとなった。

而しながら戦間の合間には、部隊において戦友の遺体の一部を火葬に付し内地送還を準備したもの、病院、部隊ごとに埋葬されたものもあった。終戦後ムシムシ島集結中に戦没したものは、各々墓標を建て埋葬された。戦犯容疑者として安達軍司令官以下一四五名をラバウルに残したまま昭和二十一年初頭生存者は全員帰還したのである。

全帰還船

- 第一次——鹿 島
 - 第二次——高栄丸
 - 第三次——鹿 島
 - 第四次——酒 匂
 - 第五次——水川丸
 - 第六次——鳳 翔
- (第五次帰還船 水川丸は現在横浜埠頭に観光船として繋留されている)

戦友会が実施した慰霊事業と主要行事を簡略列記

昭和三十一年 四月 厚生省による外地遺骨収集事業第一次計画として、南東方面収骨派遣団が練習船大成丸により実施された。東部ニューギニア方面案内は帰還戦友達で遺骨収集総数五、八八九柱、ムシユ島一、三三三柱は全収容す。
(うち氏名判明一、〇三二柱)

大成丸帰還に際しては戦友有志が出迎えました。

戦後十年間ホーランジャ奥地で生存し続けたニューギニアの戦友、島田・小島・八重樫、三名が奇跡の生還を得て同船で帰還した。

三十一年 六月 オーストラリア戦斗三九大隊戦友会一七名来日、在ニューギニア日本軍戦友と交流したいとの希望申越しあったので、吉原参謀長始めとして軍司令部関係者達一七名が三井別館に於て歓迎懇親の会を催した。

四十一年十一月 戦友会主催により在ニューギニア陸軍部隊が靖国神社において合同慰霊祭が執り行われ在京各部隊有志多数参加し慰霊に務めた。

初刊 戦友会報発行す。編集発行者 黒井得憲氏(一八八経)

昭和四十三年十一月 合同慰霊祭 在ニューギニア陸、海、空、船舶所属の生存戦友大合同して靖国神社において合同慰霊祭が執り行われた。当日参列人員一千八百余名。

祭典終了後、市ヶ谷台上、自衛隊内に於て懇親の会となり、在ニューギニア軍生存者大合同した。東部ニューギニア戦友会が結成された。
会長：杉山 茂、事務局長：柚原 久・後藤 友作とし、昭和四十四年度中に旧戦場ニューギニア地域の遺骨収集事業の実施を決定した。

当時東部方面総監、田中兼五郎氏、幕僚長、堀江正夫氏の特別配慮により自衛隊内の使用となった。その後収骨事業時、高射砲奉納時など自衛隊より格別の支援を頂いたことも両氏の尽力によるもので深謝する次第である。

四十四年 二月 戦友会報二号発行 今秋遺骨収集事業実施を期して、全戦友に趣意徹底と派遣団員の支援、経費の募金協力依頼等について会報発行す。

各部隊会よりの代表世話人達は、十日毎に会合し対策を協議し、事務局は連日これに対応した。

四十四年 七月 戦友会報三号発行 募金活動の中間報告と収骨事業準備推進情况等を報じた。

四十四年 九月 東部ニューギニア旧戦場全域の遺骨収集事業を厚生省を支援し戦友会が実施す。政府派遣遺骨収集団という名称であったが、実質は総経費を募金で賄い収骨派遣団員五五名は全員生存戦友で戦友会単独の収骨事業であった。募金総額は二、九六〇万円余遺骨収集数七、五六六柱、収骨団長 田中兼五郎氏

四十五年 三月 戦友会報四号発行 遺骨収集事業の報告と合同慰霊祭の予告号とした。

五月 合同慰霊祭 昨秋お迎えした戦友の霊を弔いながら、収骨事業報告を兼ねて靖国神社に於て合同慰霊祭を執行した。

その際、収骨団員達がウエワク海岸より帰った現地砂を靖国神社でお祓いし、靈砂として五万袋を用意し、希望遺族に差し上げた。

九月 リタント、ウエワクニューギニア戦終戦記念塔除幕式を催すので、関係戦友達の出席要請が、ウエワク州知事ヒックス氏よりあったので、杉山戦友会長外数名が参加した。日本、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド等の代表達と共に印度よりチントシン(元中佐?)出席しており、日本誹謗演説に場内が白けムードであった。
のちカラオ大酋長と面接し、旧恩を謝し懇談した。

四十六年 三月 戦友会報五号発行 奉納高射砲の除幕式案内その他を報じた。

昭和四十六年 四月 高射砲奉納 前遺骨収集事業時に現地サラモア半島に残置されていた日本軍歴戦の高射砲を貰い受けてあったものが、到着、田中兼五郎氏の骨おりで自衛隊工廠で補修復元し、靖国神社遺品館に奉納・除幕式を行った。

展示作業まで、自衛隊が支援、台座の御影石は中野慶吉氏(四四兵站)寄贈になる。

ウエワク周辺 戦跡立体マップ(地図)を自衛隊地図部隊に作成してもらい、現地の関係展示場に設置して貰うべく、ウエワク州知事宛に寄贈した。

十月 特別遺品展 ニューギニア戦域の特別遺品展が、靖国神社遺品館に於て約一ヶ月間に亘り展示された。戦友・遺族よりの出品品数一千数百点に

及び近來稀に見る盛展であると賞賛された。後藤事務長が説明員として常駐した。

四十八年九月

遺骨収集事業 厚生省主導戦友会外二団体の協力により、東部ニューギニア全域に於て約一ヶ月に亘り遺骨収集事業を実施した。今回も戦友達よりの募金協力を得て戦友会より三八名を派遣した。

収骨総数一、六三一柱 戦友会団長 堀江正夫氏である。

四十八年十二月

戦友会報六号発行 収骨事業報告と合同慰霊祭案内予告号

昭和四十九年二月

遺骨収集事業 西部ニューギニア地域の収骨事業が、厚生省主導、臺北戦友会と外二団体協力のもとで実施された。東部ニューギニア関係としてホーランジャ地区担当として当戦友会より三名派遣する、(花輪久夫外二名) 転進戦友収骨数五九七柱であった。

五十年三月

戦友会報七号発行 西部ニューギニア収骨作業報告と合同慰霊祭案内号

四月

合同慰霊祭 東部ニューギニア戦友会、陸・海全部隊合同の慰霊祭執行す。遺族の参列者も多くなりつつある。

五十一年十二月

戦友会報八号発行 収骨派遣団員達の所感と親睦連絡号

五十二年三月

厚生省主催によるニューギニア地域の慰霊巡拝遺族団の依頼により、戦跡の案内と説明のため戦友会より四名派遣支援する。

五十三年四月

合同慰霊祭 陸海空戦友会合同慰霊祭執行す。

五月

戦友会報九号発行 堀江正夫氏(参議院議員) 励ましながら懇親交流号

五十四年九月

安達軍司令官(十八軍司令官ラバウルに於て没) 三三回忌追悼式を九段会館にて執り行う。各部隊会代表参列す。

昭和五十五年九月

戦友会報十号発行 戦友間の連絡と親睦のための号。ウエクワ慰霊墓苑建設予告する。

五十六年二月

厚生省主催によるニューギニア地域、慰霊巡拝遺族団の戦跡案内、依頼により戦友三名派遣支援する。二回目である。

九月

ウエクワ慰霊公園 ニューギニア全戦域の戦没者のため、厚生省が建設中の慰霊墓苑を戦友会としても資金を拠出し支援(戦友部隊会で募金拠出した)しあつたところ完成を見たので、現地に於て除幕式となり、政府高官一行共々田中兼五郎団長外戦友多数が参列した。

九月

遺骨収集事業 厚生省主導によりブナ、ギルワ、ラエ地区の遺骨収集事業を実施した。協力三団体で戦友会より広島ニューギニア会、五一師団会より戦友十名を派遣す。

遺骨収集総数一〇七柱 戦友会団長は前垣壽三氏である。

昭和五十五年十二月

戦友会報十一号発行 ウエクワ慰霊公園完成・除幕式・収骨事業報告号

五十七年二月

杉山 茂戦友会長逝去された。戦友会は、他数団体と協力して、青山斎者に於て告別式を執り行う。戦友会各部隊会より代表参列されさ。後任戦友会長 田中兼五郎氏に依頼し承得た。

昭和五十八年四月

合同慰霊祭 東部ニューギニア戦友会大合同慰霊祭を靖国神社に於て執行する。広島ニューギニア会(南海支隊) 高知ニューギニア会(南海支隊)等全国より参集した。

九月

マダン慰霊碑 現地企業ジャント社の協力を得て、ヤボアヒル(旧野戦病院跡)の老朽化した慰霊碑を修復した。

五十九年八月

戦友会最長老顧問であつた吉原矩参謀長逝去された。戦友会(軍司令部会)は他団体と協同して、偕行社に於て告別式を執り行った。

六十年十月

遺骨収集事業 厚生省主導、戦友会他二団体協力により、セピック河以西の収骨事業を実施した。戦友会よりの派遣人員十五名遺骨収集総数一、二八七柱を迎えた。戦友会派遣団長 田中戦友会長、収骨事業他の経費は各部隊会より募金の協力を得たのである。

六十一年一月

靖国神社 本殿修復事業実施中の屋根葺替用銅板瓦五〇〇枚分の初穂料として東部ニューギニア戦友会は金百万円を奉納した。(銅板瓦には当戦友会名を記入される)

二月

戦友会報十二号発行 遺骨収集事業報告と合同慰霊祭案内号

六十二年四月

合同慰霊祭 全国より戦友・遺族を含め八八〇余名参集し盛大裡に慰霊祭を執り行った。

昭和六十三年一月

靖国神社 本殿修復協賛資金として二十万円奉納する。東部ニューギニア戦友会 同日、千鳥ヶ淵戦没者墓苑に永代供養料として十万円寄贈する。

十月

遺骨収集事業 厚生省主導によりサラワケット山中、調査遺骨収集事業を実施する。戦友会より二名(坂口悟郎氏外一名)派遣、収骨数七十柱を迎えた。

平成元年七月

遺骨収集事業 厚生省主導により、サラワケット山中、ラエ及びウエクワ地区、ソナム方面、ワリス、タラワイ両島の遺骨収集事業に戦友会より六名(後藤友作氏外五名)を協力派遣し一五八柱を迎えることが出来た。ニューギニア地域の収骨事業に対する協力団員の派遣は八回目である。



東部ニューギニア戦友会

平成2年1月現在

各部隊会化表世話人名簿

(各部隊会は関係戦友・遺族で構成されている)
相互の懇親と遺族よりの問合せに利用されたい。

会=会長
代=代表世話人
事=事務長

部 隊 会 名	編成地	部隊号		氏 名 (敬称略)	郵便番号	住 所	電話番号
戦友会々長	東 京	猛7910	会	田中 兼五郎	201	狛江市東和泉3-7-25	03-480-2427
第十八軍司令部	"	"	事	後藤 友作	157	東京都世田谷区砧6-32-5	03-416-6504
南洋第六支隊	松 山	猛12503					
迫撃第21大隊	沼 田	猛8123	代	西尾 龍	158	東京都世田谷区上野毛4-26-8	03-701-5154
第十二防空隊司	市 川	猛5061	代	西尾 利博	395	飯田市鼎上山3184	0265-23-4794
機関砲第15中	市 川	猛1995					
機関砲第20中	馬 山	猛7463	代	新下 明	737-12	広島県安芸郡音戸町北隠渡2-6-26	0823-52-0788
機関砲第24中	馬 山	猛7464	代	梅山 英太郎	849-51	佐賀県東松浦郡浜玉町谷口	0955-56-6640
機関砲第25中	福 岡	猛5067	代	石坂 一義	243-04	海老名市国分3106-1	0462-31-0732
機関砲第29中	市 川	猛1225					
機関砲第32中	東 京	猛4332	代	田丸 辰夫	251	藤沢市大庭5450 駒寄団地9-203	0466-87-9761
機関砲第33中	市 川	猛1943	代	大竹 信太郎	327	佐野市若宮上町12-17	0283-24-8373
機関砲第34中	市 川	猛1944					
機関砲第35中	市 川	猛1945	代	山口 正則	939-23	富山県婦負郡八尾町西神通り500	0764-54-3086
機関砲第35中	加古川	猛6078	代	前田 信次	669-31	兵庫県水上郡山南町畑の内422	0795-77-1592
機関砲第36中	加古川	猛6079					
機関砲第37中	浜 松	猛6080	代	岡田 義徳	410-32	静岡県田方郡天城湯ヶ島町湯ヶ島19	0558-85-0077
機関砲第38中	小 倉	猛8052	代	安藤 六人	228	座間市緑ヶ丘3-49-27	0462-51-3875
高機関砲第39中	小 倉	猛8053	代	橋本 喜蔵	328-02	三浦市三崎町諸磯1500 油壺エデン7807	0468-89-2860
高射砲第50大	牡 丹 江	猛3616	代	水野 徳次	950	新潟市近江2-29-2	0252-84-2825
高射砲第56大	東 京	猛4330	代	渡辺 貞一	915	武生市八幡2-99-86	0778-23-6416
高射砲第58大	京 城	猛7460	代	渡辺 尚三	747	防府市下右田214-1	0835-23-3844
高射砲第61大	東 京	猛1929	代	東風谷 秀雄	116	東京都荒川区荒川5-35-2	03-892-3041
高射砲第62大	市 川	猛1930	代	矢島 孝輔	231	横浜市中区末吉町3-49	045-251-7850
高射砲第63大	市 川	猛1931	代	中村 好伸	380	長野市上駒沢359	0262-46-4330
高射砲第64大	企 救	猛8050	代	石田 久喜	143	東京都大田区大森西3-6-9	03-761-3635
高射砲第65大	加古川	猛6099	代	齊藤松左衛門	247	鎌倉市山崎659	0467-46-7585
高射砲第66大	加古川	猛6039	代	三宅 高志	707-01	岡山市平野113-9	0862-92-0438
高射砲第38中	京 城	猛7467					
高射砲第39中	甘 木	猛8033	代	戸野 光王	598	泉佐野市長滝1745	0724-65-2667
高射砲第40中	基 隆	猛1751					
高射砲第41中	高 雄	猛1752	代	藤田 基久二	814	福岡市早良区城西3-4-18	092-831-2024
高射砲第42中	名 古 屋	猛9824					
高射砲第58-1中	京 城	猛7460					
照空隊4大2中	久留米	猛5066	代	石塚 卓三	665	宝塚市中山桜台2-25-12	0797-89-0586
照空隊1中	名 古 屋	猛6081	代	磯崎 光弘	617	長岡京市神足雲宮5-103	075-954-4058

部 隊 会 名	編成地	部隊名		氏 名 (敬称略)	郵便番号	住 所	電話番号
照 空 隊 2 中	市 川	猛1996	代	青山 金一	157	東京都世田谷区北鳥山1-3-16	03-300-2958
照 空 隊 3 中	甘 木	猛8032	代	立川 忠男	840-01	佐賀市高木瀬東5-5-29	0952-31-2079
照 空 隊 4 中	台 北	猛1753	代	内尾 捨三郎	879-03	宇佐市下高930	0978-32-0768
照 空 隊 7 中	市 川	猛1932	代	深山 満	270-11	我孫子市寿2-6-21	0471-83-2047
照 空 隊 8 中	市 川	猛1933	代	島田 喜四郎	168	東京都杉並区方南1-4-12	03-328-7773
独 立 工 兵 8 聯	金 沢	猛5548	代	伊東 基保	150	東京都渋谷区広尾4-1-9-407	03-486-4340
独 立 工 兵 15 聯		南海支隊	代	山本 鹿之助	580	松原市丹南3-4-25	0723-31-0779
独 立 工 兵 30 聯	高 槻	猛6017	代	小野 正然	661	尼崎市榎堂1-25-1	06-491-9588
独 立 工 兵 33 聯	豊 橋	猛3795	代	鈴木 良雄	413-04	静岡県加茂郡東伊豆町稲取713	0557-95-2665
独 立 工 兵 36 聯	柏	猛9423	代	会川 利一	154	東京都世田谷区梅ヶ丘1-3-6	03-420-5443
独 立 工 兵 37 聯	熊 本	猛1892	代	長瀬 半次	594	和泉市弥生町3-11-7	0725-44-0865
35 野 戦 道 路 隊	金 沢	猛4646	代	藤松 巳代治	399-82	長野県南安曇郡豊科町光1020	0263-72-3506
36 野 戦 道 路 隊	豊 橋	猛5734					
37 野 戦 道 路 隊	高 槻	猛4020					
38 野 戦 道 路 隊	京 都	猛8231	代	彦坂 幸七	354	埼玉県入間郡三芳町藤久保3806-12	0429-58-2480
40 野 戦 道 路 隊	岡 山	猛10157					
44 野 戦 道 路 隊	盛 岡	猛5244	代	吉田 哲夫	982	仙台市門前町4-3	0222-48-6434
48 野 戦 道 路 隊	金 沢	猛3605	代	関口 光明	411	三島市文教町2-32-14	0559-86-8865
軍 通 信 ・ 電 3 聯	相 模 原	猛11400	代	加瀬 茂	160	東京都新宿区大久保2-6-10-302	03-209-4151
独 立 無 線 7 小	"	猛11401		(各隊軍通信内)			
独 立 無 線 8 小	"	猛11402					
9 固 定 通 信 小	ラバウル	猛11213					
46 固 定 無 線 小	広 島	猛5121					
第 3 輸 送 司	名 古 屋	猛5702	代	坪田 俊久	518	上野市大野木444	0595-21-3697
第 4 輸 送 司	堺	猛6050		城戸 正	714	笠岡市用之江1967	08656-6-3794
44 兵 站 地 区 隊	水 戸	猛4817	代	三田寺午之介	311-01	茨城県那珂郡那珂町後台2865	02929-8-0011
54 兵 站 地 区 隊	篠 山	猛6030	代	本田 好春	590	堺市錦之町西1-7	0722-33-6308
独 立 自 動 車 39 大	金 沢	猛4630	代	三村 彦一	275	習志野市本大久保2-10-33	0474-72-0180
独 立 自 動 車 42 大	津 田 沼	猛1038					
独 立 自 動 車 225 中	宇 都 宮	猛2862	代	師田 賢説	399-45	伊那市西箕輪字羽広	0265-73-5472
27 野 戦 兵 器 廠	名 古 屋	猛2688	代	吉田 恵一	154	東京都世田谷区三宿1-15-10	03-422-5090
27 野 戦 貨 物 廠	新 京	猛2689	代	針谷 和男	251	藤沢市片瀬山3-16-11	0466-26-0004
27 野 戦 自 動 車 廠	姫 路	猛2690	代	青山 策馬	615	京都市西京区桂山田平尾町46 ライフィン京都	075-393-2141
陸 上 勤 務 76 中	松 本	猛4642	代	渡辺 祐蔵	390-03	松本市浅間温泉283	0263-46-1158
水 上 勤 務 37 中	東 京	猛3026	代	斉藤 衛	154	東京都世田谷区野沢2-6-6	03-421-5726
特 設 水 上 勤 務 16	昭 南	猛10378	代	米山 利秋	158	東京都世田谷区用賀2-21-14	03-708-5741
特 設 水 上 勤 務 17	佐 世 保	猛10379		(各隊共通)			
特 設 水 上 勤 務 18	佐 世 保	猛10380		"			
特 設 水 上 勤 務 19	昭 南	猛10381		"	157		
建 築 勤 務 49 中	奈 良	猛4015	代	早川 健次	567	茨木市美沢町5番 F1106号	0726-35-3447
建 築 勤 務 51 中	奈 良	猛8234					
特 設 建 勤 26 中	昭 南	猛10383	代	青木 秀夫	910	福井市寮町38-27	0776-53-4190
79 兵 站 病 院	金 沢	猛4614	代				
90 兵 站 病 院	堺	猛6009	代	富岡 伊三郎	543	大阪市阿倍野区文の里3-6-7	06-622-5825
112 兵 站 病 院	善 通 寺	猛6412	代	藤本 敬貴	756	善通寺市上吉田町671 労住協 第8ビル207号	0877-62-1501
113 兵 站 病 院	善 通 寺	猛6413					
117 兵 站 病 院	久 留 米	猛6769	代	諸岡 猷夫	816	福岡市南区井尻3-9-21	092-581-1016
123 兵 站 病 院	弘 前	猛5223	代				
23 防 給 水 隊	ハルビン	猛2626	代	平本 泰三		世田谷区站1-11-2-202	03-416-2047
25 防 給 水 隊	ハルビン	猛2628	代	新井 宗隆	754-12	山口県吉敷郡阿知須町寺河内4171	0836-65-2048
患 者 輸 送 46 小	東 京	猛1006					
患 者 輸 送 48 小	名 古 屋	猛3756	代	戸田 伊八	470-21	愛知県知多郡東浦町唐地屋敷9	0562-34-8724
患 者 輸 送 63 小	善 通 寺	猛6408			470-21		
患 者 輸 送 74 小	堺	猛6034	代	川端 梅一	649-11	和歌山県日高郡由良町三尾川	0738
患 者 輸 送 75 小	堺	猛6075					
野 戦 憲 兵 隊				小林 久光	389-22	飯山市大字木島580	0269-62-3024

第二十師団 朝 部 隊 会

部 隊 会 名	編成地	部隊号		氏 名 (敬称略)	郵便番号	住 所	電話番号
第20師団司令部	京 城	朝2099	会	高田 佐寿郎	192-02	多摩市一の宮152-16	0423-75-8486
20師歩兵团, 司	京 城	朝2051	代	平井 和雄	174	東京都板橋区常盤台3-26-8	03-960-8424
歩 兵 第 78 聯	京 城	朝2053	代	斉藤 顕	164	東京都中野区中央3-32-16	03-381-2250
歩 兵 第 79 聯	京 城	朝2054	代	福家 隆	190-12	武蔵村山市三ッ藤1-82-3	0425-60-2174
歩 兵 第 80 聯	大 邸	朝2055	代	古川 静夫	194	町田市旭町3-22-77	0427-23-5299
野 砲 第 26 聯	京 城	朝2059	代	大畠 正彦	309-17	西茨城郡友部町大田町松山208-33	02967-7-3028
工 兵 第 20 聯	京 城	朝2060	代	加藤 隆幸	509-72	恵那市大井町144-2	05732-5-4698
輜 重 第 20 聯	京 城	朝2062	代	坂本 逸郎	755	宇部市字川上33-12	0836-33-3660
師 団 通 信 隊	京 城	朝2061	代	野瀬 弘行	143	大田区大森北1-17-11-1205	03-763-8368
師団兵器勤務隊	京 城	朝2063	代	秋山 是行	882	延岡市古城町2-3-19	0982-35-3224
師 団 衛 生 隊	京 城	朝2064	代	小野沢 政夫	171	東京都豊島区雑司ヶ谷2-8-40	03-983-3022
20師第1野病	京 城	朝2065	代	藤原 知	887	日南市字平野4317-2	0987-22-4313
20師第2野病	大 阪	朝2073					
20能第4野病	大 阪	朝2074					
20師防給水隊	京 城	朝2067					

第四十一師団 河 部 隊 会

部 隊 会 名	編成地	部隊号		氏 名 (敬称略)	郵便番号	住 所	電話番号
第41師団司令部	宇 都 宮	河3561	会	鈴木 大	165	東京都中野区白鷺2-13-3-309	03-337-0431
41師歩兵团, 司	宇 都 宮	河3563	代	藤井 玉一	544	大阪市生野区新今里3-20-6	06-751-0280
歩 兵 第 237 聯	水 都 戸	河3564	代	中村 福一	185	小平市津田町2-16-5	0423-41-7752
歩 兵 第 238 聯	高 崎	河3565	代	梶塚 喜久雄	362	上尾市小泉35-128	048-726-5168
歩 兵 第 239 聯	宇 都 宮	河3566	代	神戸 六雄	145	東京都大田区東雪ヶ谷2-31-11	03-729-0274
山 砲 第 41 聯	宇 都 宮	河3567	代	浅野 一夫	344	春日部市一の割617-6	0487-37-4599
工 兵 第 41 聯	水 都 戸	河3568	代	宮沢 保平	101	東京都千代田区神田和泉町2	03-862-5561
輜 重 第 41 聯	宇 都 宮	河3569	代	赤沢 昇	247	鎌倉市大船5-15-10	0467-45-6818
師 団 通 信 隊	宇 都 宮	河3570	代	山本 隆信	300	土浦市生田町6-4	0298-22-0222
師団兵器勤務隊	宇 都 宮	河3571					0298-22-0222
師 団 衛 生 隊	宇 都 宮	河3572	代	小林 順次	379-01	安中市安中1-5-28	0273-82-0668
41師第1野病	宇 都 宮	河3573	代	兵藤 博	106	東京都港区西麻布3-19-1	03-408-1570
41師第2野病	宇 都 宮	河3574					
41能第3野病	宇 都 宮	河3576					

第五十一師団 基 友 会

部 隊 会 名	編成地	部隊号		氏 名 (敬称略)	郵便番号	住 所	電話番号
第51師団司令部	宇 都 宮	基2800	会	岡本 隆久	198	青根市根ヶ布2-1370-25	0428-23-1003
51師歩兵团, 司	宇 都 宮	基2801	事	吉川 正芳	170	東京都豊島区南大塚3-15-2	03-986-5541
歩 兵 第 66 聯	宇 都 宮	基2802	代	篠田 増雄	130	東京都墨田区本所3-2-7	03-622-8724
歩 兵 第 102 聯	水 戸	基2803	代	岡野 宗五郎	113	東京都文京区本郷1-4-11	03-812-0470
歩 兵 第 115 聯	高 崎	基2804	代	飯塚 修正	116	東京都荒川区日暮里1-41-11	03-803-4311
野 砲 第 14 聯	宇 都 宮	基2807	代	小沼 忠徳	157	東京都世田谷区砧1-13-20	03-417-0021
工 兵 第 51 聯	水 戸	基2808	代	山形 新一	143	東京都大田区大森西5-29-3	03-764-4751
51師団通信隊	宇 都 宮	基2809	代	亀田 英二	104	東京都中央区月島3-24-4	03-531-0181
輜 重 第 51 聯	宇 都 宮	基2810	代	原田 万也	145	東京都大田区南雪ヶ谷5-10-7	03-278-3345
51師兵器勤務隊	宇 都 宮	基2811					
51師, 衛生隊	宇 都 宮	基2812					
第1野戦病院	宇 都 宮	基2813	代	赤沢 喜三郎	113	東京都文京区千駄木4-4-4	03-821-7741
第2野戦病院	宇 都 宮	基2814					
第3野戦病院	宇 都 宮	基2815					
第4野戦病院	宇 都 宮	基2816					

暁 部 隊 会

部 隊 会 名	編成地	部隊号		氏 名 (敬称略)	郵便番号	住 所	電話番号
第一船舶団司令部	柳 井	暁2943	会				
船舶工兵1／1中	石 巻	暁6170	代				
船舶工兵5聯	柳 井	暁6173	代	紫田 政利	166	東京都杉並区高円寺南3-47-8-406	03-216-2661
船舶工兵9聯	和 歌 山	暁9421	代	吉沢 健四郎	361	行田市谷郷1-14-9	0485-56-7469
第一揚陸隊	秋 田	暁2946	事	菅原 栄治	010	秋田市南通り亀の町12-2	0188-33-3522
第三揚陸隊	昭 南	暁2948	代	鳥羽 義行	029-26	陸前高田市小友町上新田15	01925-6-3515
第九揚陸隊	台 湾	暁6148					
海上輸送4大	柳 井	暁6191					
31碇泊場司		暁4636					
49碇泊場司	宇 品	暁9738					
第3野戦船舶廠		暁2951					
水上勤務40中	三 島	暁5726					
水上勤務59中	大 邱	暁8868					
船舶通信高松小	宇 品	暁2955					
船舶固定通信隊							
船 工 9							

海軍ニューギニア会

部 隊 会 名	編成地	部隊号		氏 名 (敬称略)	郵便番号	住 所	電話番号
海軍ニューギニア会			会	滋賀 秀正	152	東京都目黒区南1-48-5	03-717-6635
"			事	川田 浩二	150	東京都渋谷区神宮前1-11-11-702	03-403-3785
第8建設部会			代	持田 三郎	114	東京都北区田端1-21-4	03-828-0347
82警会			代	岡部 直平	625	舞鶴市丸山口町45-3	0773-62-0281
31防空会			代	大西 庄松	920-01	金沢市大場町東6	0762-58-5075
南十字会			代	大森 文子	228	相模原市東林間1-15-1-704	0427-44-2453
柿内部隊			代	幸 明夫	245	横浜市戸塚区俣野町1403 ドリームハイツ	045-851-8748

航 空 部 隊 会

部 隊 会 名	編成地	部隊号		氏 名 (敬称略)	郵便番号	住 所	電話番号
第四航空軍司			会	衣笠 駿雄	235	横浜市磯子区森1-15-2 第2磯子ハイツ	045-761-4033
航空部隊会			事	平川 義夫	120	東京都足立区千住竜田町18-6	03-888-0642
第4航空軍司			代	近藤 又一郎	167	東京都杉並区西荻北2-11-3-402	03-395-4782
208戦隊			代	本間 正七	151	東京都渋谷区笹塚2-41-22	03-388-8281
21飛行場大			代	棚橋 勲	151	東京都渋谷区千駄ヶ谷2-34	03-478-3527
22飛行場大			代	諸田 照吉	161	東京都新宿区西落合2-22-3	03-951-8551
第6航測隊			代	仲村 進	294-02	館山市藤原1247-6	0470-28-1143
41飛行場大			代	松井 正治	110	東京都台東区北上野2-32-8	03-844-4362
第12気象隊			代	小畑 市郎	292	木更津市長須賀817	0438-22-3238
白 梅 会			代	中垣 国男	158	東京都世田谷区等々力5-7-7	03-703-6090

地 域 ニ ュ ー ギ ニ ア 会

部 隊 会 名	編成地	部隊号		氏 名 (敬称略)	郵便番号	住 所	電話番号
長野ニューギニア会			会	大久保 豊	390	松本市大手2-1-4	0263-35-4500
富山ニューギニア会			会	茂住 光雄	939	富山市若竹町3-89 (太田安則方)	0764-29-3415
栃木ニューギニア会			事	白田 正康	320	宇都宮市大通り2-2-3	0286-35-4312
広島ニューギニア会			会	前垣 寿三	724-05	広島市西条町上市2-4	08242-3-2118
"			事	樽田 篤磨	733	広島市西区観音町19-1	0822-93-3555
高知ニューギニア会			会	永野 忠男	780	高知市桜井町1-5-13	0888-82-6669
群馬ニューギニア会			事	大塚 邦男	379-21	前橋市舟下川町50-14	0272-65-3633
ドリアン会(5D-21i)			代	森原 梅次郎	733	広島市舟入本町9-3	0822-33-0053

編集後記

(無断転載禁)

平成二年三月発行

東部ニューギニア戦友会 会報第十三号
編集・発行人 後藤友作
発行所 東部ニューギニア戦友会事務局

東京都世田谷区砧六丁目三一—五
電話 東京〇三—四二六—六五〇四
振替 東京六一七五一四三番